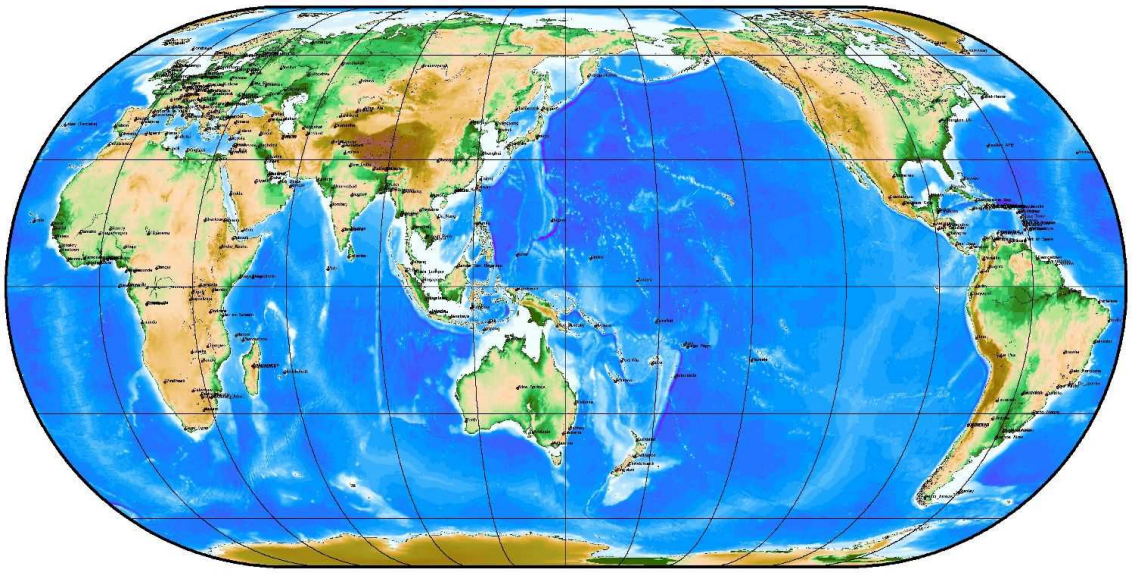
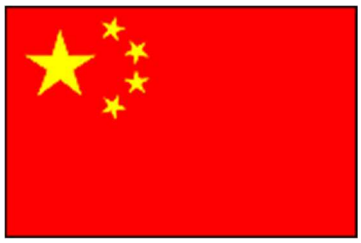
2019 年度和歌山県立日高高等学校

国際交流のあゆみ





日高高校　教育開発部

目次

海外研修

ページ

1　インドネシア研修　【10 月】　・・・・・　1

2　カナダ研修　【10 月】　・・・・・　12

3　ベトナム研修　【11 月】　・・・・・　24

姉妹校交流

1　中国　西安中学訪問団来航　【9 月】　・・・・・　36

2　デンマーク　フレデリクスハウン高校訪問　【10 月】　・・・・・　43

その他

1　アジア・オセアニア高校生フォーラム 2019　【7 月】　・・・・・　52

海外研修

インドネシア

1. 目的

(1) インドネシアにおける防災対策、自然災害への危機管理と取組について連携機関で学ぶ。

プログラム① 国際協力を学ぶ

プログラム② アジア経済の仕組を学ぶ

プログラム③ 世界遺産の被災と復興を学ぶ

(2) 「総合的な学習の時間・防災分野」の取組を紹介するとともに、現地高校生と協働学修をする。

プログラム④ 英語を用いた協働学修に取り組む

(3) 研修期間を通してコミュニケーション力を磨き、自国文化および異文化への理解を深める。

2. 日時

2019 年（令和元年）10 月 14 日（月）－ 10 月 19 日（土）　（現地 4 泊、機中 1 泊）

3. 研修先

インドネシア共和国（ジャカルタ市、ジョグジャカルタ市、ボゴール市）

4. 事前・事後研修

(1) 事前研修①　全体研修：7 月上旬 2 回

(2) 事前研修②　英語研修：夏期休暇中 6 回

(3) 事前研修③　防災学修：夏期休暇中 1 回

(4) 事前研修④　プレゼン研修：夏期休暇～渡航まで

(5) 事後研修　研修総括、発表用ポスター作成、報告書作成、：帰国後～2 月

5. 研修団

参加生徒：1 年生 3 名　2 年生 1 名、計 4 名

引率教員： 2 名

6. 主な訪問先

(1) JICA インドネシア事務所　JICA Jakarta Office

(2) 公共事業省水資源総局　Integrated Water Resources Management

(3) ERIA ジャカルタ本部　ERIA Jakarta Office
(4) ボロブドゥール史跡公園　BOROBUDUR
(5) プランバナン寺院史跡公園　PRAMBANAN TEMPLE
(6) マダニア高校　Madania Secondary School
(7) 国立博物館、独立記念塔、イスティクラルモスク、ファタヒラ広場、スンダクラパ港　National Museum、MONAS Monument、Istiqlal Mosque、Fatahillah Square、Sunda Kelapa port

7.研修日程

日次	月日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	内容(宿泊地)
1	10月14日(月)	関西空港　集合 大阪　発 デンパサール着 デンパサール発 ジャカルタ　着 ホテル　着 夕食・ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ・点呼	08:30 10:40 16:45 18:43 19:45 21:00 21:30	 GA883便 GA417便 専用車	ジャカルタへ （ジャカルタ市内泊）
2	10月15日(火)	集合出発 ジャカルタ市内 ホテル着 点呼・ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	08:30 20:00 20:30	専用車	JICAインドネシア事務所 (1)インドネシアの自然災害 (2)JICAの防災協力 公共事業省水資源総局 (1) 水資源・防災分野への支援や地盤の液状化 (2) 地盤沈下対策プロジェクト ERIAジャカルタ本部 (1)防災の取り組み （ジャカルタ市内泊）
3	10月16日(水)	集合出発 ジャカルタ　発 ｼﾞｮｸﾞｼﾞｬｶﾙﾀ　着 ｼﾞｮｸﾞｼﾞｬｶﾙﾀ　発 ジャカルタ　着 ホテル着 点呼・ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	05:45 06:30 08:10 18:20 20:00 21:00 21:50	専用車 GA204 便 GA215 便 専用車	世界遺産の被災と復興研修 (1)ボロブドゥール史跡公園 (2)プランバナン寺院史跡公園 （ジャカルタ市内泊）

4	10月17日 (木)	集合出発 ボゴール　着 ボゴール　発 ホテル　着 夕食 点呼・ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	06:30 07:50 15:30 17:20 18:00 21:00	専用車 専用車	マダニア高校訪問 (1)学校交流・授業体験 (2)防災についての協働学習 （ジャカルタ市内泊）
5	10月18日 (金)	集合出発 ジャカルタ市内 ジャカルタ発 デンパサール着	09:30 18:40 21:40	専用車 GA418便	ジャカルタ市内視察研修訪問 先：国立博物館,独立記念塔,イスティクラルモスク,ファタヒラ広場,スンダクラパ港 (1)自国文化・異文化理解 （機内泊）
6	10月19日 (土)	デンパサール発 大阪　着 解散	00:25 08:20 09:00	GA882 便	大阪へ

【1～2 日目　インドネシア入国～JICA、ERIA】

1 日目、関西空港を 11 時ごろに出発した。6 時間のフライトの後、バリ島にあるデンパサールに到着した。インドネシアへの入国審査では早速、文化や人柄の違いを感じた。パスポートにカバーをかけていると、「本みたいにしたのね」とフレンドリーに話しかけてきてくれた。また、談話をしながら仕事をする姿には驚いた。そして、空港内で冷房が効いているところは 20 度くらいが当たり前で、肌寒く感じたのを覚えている。一方で、すべての施設で冷房が効いている訳ではなく、暑く感じることもあった。また、その温度差に対応するのも難しかった。その後、デンパサール空港を経由し、ジャカルタに向かった。デンパサールからジャカルタまでは 1 時間半かかった。空港でガイドさんと合流し、1 時間くらいかけて、バスでホテルまで移動した。ほとんどの車がオーバースピードで走行しており、バスの運転手さんでさえもハイスピードで運転していた。交通に関しては非常にせっかちな性格なのだなと感じた。そして、高速道路を利用したのだが、ジャカルタの街は高層ビルが建ち並び、道路脇に設置された大型の電光掲示板には、多くの広告が表示されていた。そのため、街全体がとても明るく感じた。また、ホテルから見えた夜景はきれいだったが、すぐ隣にスラムのような場所も見受けられ、格差

を感じさせられる光景だった。だが、インドネシアの方は皆、気さくで心優しい人であるため、私もあまり緊張することなく過ごせた。

2 日目、JICA と ERIA を訪問した。まず、JICA では主に 3 つのことを教えていただいた。1 つ目に、JICA のインドネシア支部の皆さんが行っておられる災害関連の事業を説明していただいた。2 つ目に、液状化について説明していただいた。中部スラウェシ地震で、大規模な液状化と地滑りが一度に起こり、その原因解明に日本の研究者も尽力されているということだった。3 つ目に、地盤沈下についてだ。首都ジャカルタは現在、多くの商業施設やマンションが建設されており、急激な経済成長を遂げている。だが、一方でそのような施設が地下水を大量に組み上げるため、大規模な地盤沈下が起こっているそうだ。そして、ERIA では、経済格差の深化・発展格差の縮小・持続可能な経済成長、この 3 つを目標に、日々ご尽力をされているということだった。

これらのお話をお聞きして、私が感じたことは 3 つある。まず、災害に関するインドネシア人と日本人の考え方の違いに驚いた。日本人は防災意識が高い一方で、インドネシア人は自然には逆らえないため仕方がないという考えを持っているそうだ。よって、住民たちは災害発生後、政府の援助を待たずに自主的に仮設のテントを立て、新たなコミュニティを築いていくそうだ。日本では被災後、公助が中心になってくるが、インドネシアの復興は自助、共助が大きな役割を果たしているように感じた。被災してもすぐに自分たちで何とかしよう、生活を元に戻そうとする精神と行動力は凄いなと思った。だが、政府が災害発生後にあまり機能していないという点では、国力の脆弱性を感じた。そして、そこで JICA が"Built Back Better"をモットーに活動されていることを知り、ただ支援するのではなく、より良くすることを目指しているのがすごいと思った。

次に、JICA や ERIA は現地で何か実際に行っているのかと思っていたが、プランの提示が一番大きな活動であり、現地の人が支援期間が過ぎた後でも彼ら自身で活動できるよう、JICA や ERIA の指導のもと、現地の人が実際に活動しているということが分かった。

さらに、私が一番興味を持ったのが、インドネシアでは情報量が少なく、その伝達システムが不十分だということだ。警報システムはなく自分で情報収集をしなければならないそうだ。また、観測データも少なく信用できるデータが少ないと伺った。

このようなことから、経済面の課題もあり政府は災害関連であまりうまく機能できていないが、住民たちはそれを補うように彼ら自身で活動していることが分かった。よって、インドネシアでは、防災事業を行政がもっと行うことで、被害は最小に収められると感じた。

私が今回の研修を通して成長できたと感じることは 3 つある。1 つ目は、物怖じせずに話しかけることができるようになったことだ。初めは、何か尋ねたりお願いしたりするのに、どんな単語を使ったらいいのか、作った文は合っているのかと、事細かにチェックして会話をしていた。だが、研修の最後の方では何か伝えたいことができたら、すぐに喋っていた。それは色々と考える前に、

単語とジェスチャーで伝わるだろうという確信を持っているからだと思う。このような心持は話しかける勇気に直結している。つまり、会話をする時は細かいことは気にせず、自分の持っている知識と技術をフルに活用することが必要なのだ。失敗を恐れないくらいの勇気と行動力が自分の苦手意識を克服し、挑戦することに繋がると思う。

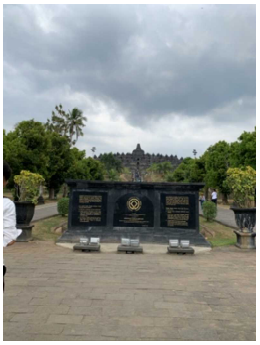
2 つ目は、質問力 がついたということだ。JICA と ERIA の訪問では特に質問をする機会がたくさんあった。まだまだレベルの低い質問しかできなかったが、それでも質問は礼儀であり、学びを深めるためには必要不可欠だ。プレゼンで本当に大切なのは質疑応答やディスカッションではないかと私は思う。だからこそ、自分自身やそのプレゼンを聞いた人の全員の学びを、より一層深めるような質問をできるようになりたいと思う。また、質問とは逆に答える技術を身につけるとみんなの理解も深まると思う。そのためには情報を全て管理し、時と場合によって瞬時にそれらを取捨選択する力や、質問の意図をくみ取る力をつける必要があると感じた。

3 つ目は、リスニング力だ。リスニング力といっても言葉を拾って繋げることで内容をくみ取る力だが、完璧に英語をマスターしていない私にはまだ難しい。だから、聞き取れなかったことや理解できなかったことをはっきり相手に伝え、きちんと言葉のキャッチボールができるようになりたい。なぜなら、私は遠慮して分からなかったことを聞き流し、後悔したからだ。

最後に、このような体験をさせていただいたのはたくさんの人の支えがあってこそのものだという感謝を忘れず、学んだことをこれからの生活に活かしていきたい。

（1 年 6 組　祭本　真由）

【３日目　ボロブドゥール遺跡、プランバナン寺院群】



3 日目は、朝から飛行機に乗りジャカルタからジャワ島中部にあるジョグジャカルタに行った。ジョグジャカルタは田舎で物価が安く、治安の良い町だ。ジョグジャカルタでは、ボロブドゥール遺跡とプランバナン寺院群の 2 つの世界遺産へ行った。

ボロブドゥール遺跡は、8 世紀後半から 9 世紀初めに建設された仏教の石像建造物だ。1991 年に世界文化遺産に登録された。120m 四方の基壇上に 6 層の方形壇、3 層の円壇が載り、最上層には中心仏塔を載せている。中心仏塔をストゥーパとも言う。全体の高さは 42mだ。各層に仏像や本生譚などか刻されている。各層に設けられた回廊をめぐり上るにつれ、仏教の教義が理解できる仕組みになっている。回廊上部の仏龕に金剛界五如来 432 体、円壇上の小仏塔にシャカルムニ仏 72 体がある。円壇の 1 層目には 32 体あり、ひし形の穴ができるように石がつまれている。2 層目には 24 体あり、1 層目と同じでひし形の穴

ができるように石がつまれている。3 層目には 16 体あり、四角形の穴ができるように石がつまれている。手や顔がない仏像もある。しかし、世界文化遺産に登録されているため再建ができない。

プランバナン寺院群は 9 世紀半ばに建造されたヒンドゥー教遺跡だ。1991 年に世界文化遺産に登録された。基壇の中心にシヴァ堂、北にヴィシュヌ堂、南にブラフマー堂が並び、それぞれの正面には各神様の乗り物であるナンディ、ガルーダ、ハンサの堂がある。シヴァ堂は高さ 47mでシヴァ像がある部屋の他に 3 つの部屋がある。1 つ目は、南室にあるインドの聖者でシヴァの導師のアガスティアだ。2 つ目は、西室にある学問と商業の神様、シヴァの息子で象の頭を持つガネーシャだ。この仏像を触ると賢くなれると言われているそうだ。3 つ目は、北室にあるシヴァの妻ドゥルガーの像がある。この仏像を触ると美しくなれると言われているそうだ。しかし、男性が触ることはできないそうだ。プランバナン寺院群の別名は「ロロ・ジョングラン」だ。この地に伝わる伝説に、美しい王女「ロロ・ジョングラン」が大男によって石像に変身させられてしまったという話がある。ドゥルガー像が「ロロ・ジョングラン」ではないかといわれている。

ボロブドゥール遺跡は、1 番上まで登るのに時間がかかった。また、階段もとても急で登りにくかった。階段が急だから手すりがあるところもあった。ボロブドゥール遺跡に行って印象に残っていることが 2 つある。1 つ目は、上に上がっていくにつれて話が進んでいくということだ。ボロブドゥール遺跡が建てられた時代にあった出来事などが石に彫られていた。そのあった出来事が全てストーリーになっていた。また、動物もたくさんあった。2 つ目は、仏像のことだ。ボロブドゥール遺跡にあった、仏像は手や顔が無いものが多かった。それは、つくられた頃にもっていかれたものだといっていた。しかし、世界文化遺産に登録されたため、見つかったものであっても元に戻すことは出来ないそうだ。手や顔が全てあるものはとても少なかった。上に上がっていくと円壇があるそこにも手がないものがあった。円壇は中が隙間からしか見えないものがほとんどだった。そのため、中の仏像を見るには隙間から覗かないといけなかった。しかし、一つだけ仏像が見えているものがあった。これは、なぜ見えているのか分からなかった。なぜ、見えるようになっているのか聞いたらよかったと思った。これは、全て人の手によってつくられたものだ。だから、作りかけのところがたくさんあった。例えば、こま犬みたいなものが 2 つあった。しかし、そのうちのひとつは完成しているがもうひとつは完成していなかった。それは、つくる人が途中で嫌になりやめたからだと言っていた。

プランバナン寺院群は、シヴァ道に 3 つの部屋があり、それぞれ部屋に意味があった。その意味の中で 1 番印象に残っていることは西室にある仏像だ。なぜかと言うとこの仏像は、学問の仏像だからだ。この仏像を触ると賢くなれると言われているので、1 番印象に残っていた。プランバナン寺院群で印象に残っていることは 2 つある。1 つ目は、石に彫られた絵がストーリーであるということだ。たくさんの動物が彫られているところやその頃の時代にあった出来事が彫られていた。2 つ目は、地震の時に起きた影響がそのまま残されているということだ。例えば、地震の時に落ちたものが今もそのまま置かれていることや地震によって石がズレているところなどだ。このように残していくことで次の世代の人へもプランバナン寺院群の大切さが受け継がれていくのだと思った。

ボロブドゥール遺跡とプランバナン寺院群に行って、ヒンドゥー教と仏教は、宗教は違うけれど似ているところがあるなと思った。それは、両方にストーリーのある絵が彫られているということだ。内容は違うがストーリーがあるということは同じだと思った。他にも、こま犬のようなものがボロブドゥール遺跡にもプランバナン寺院群にもあった。これは、日本にもあるように何か意味することがあるんだと思った。私は、この 1 日で他宗教でも似ているところがあるということがわかった。そして、自分たちとは宗教が違うからと言って差別するのはよくないなと思った。各宗教について、知っておくことも大切だと思った。

この研修のテーマは「防災」だ。インドネシアに行って、「防災」について聞くことがとても多かった。JICA と ERIA の訪問では自然災害が起こった時の対策を考えていた。また、自然災害がどのようなところで起こりやすいかなどを過去のデータから考えていた。ボロブドゥール遺跡とプランバナン寺院群では、今までに起こった自然災害の跡を残していた。例えば、地震によって壊れてしまったものをそのまま残していたことだ。そのまま残しておくことで次の世代の人へ世界遺産や自然災害を知ることの大切さが受け継がれていくのだと思う。マダニア高校では、お互いの国の現状から自然災害が起こった時や起こる前に高校生ができることを考えた。日本は、高齢化が進んでいるので高齢者の方に何ができるかを考えました。インドネシアは、子供が多いことから子供たちに自然災害についてどのように伝えるかを考えていた。インドネシアのいろいろなところで「防災」について学ぶことができた。日本でも、自然災害が多いので聞くことはあるが、日本とは違う防災対策などを知ることができた。また、日本とは起こっている自然災害が違っていた。和歌山県では南海トラフ巨大地震が３０年以内に起こるといわれている。もし、南海トラフ巨大地震が起こった時にできることをこの研修で学んだことを生かして考えたいと思った。考えるだけでなく実行もできるようになりたいと思った。

（1 年 6 組　細田　一葉梨）

【4 日目　学校交流】

私達も昨年と同じマダニア高校を訪ねさせてもらいました。オープンセレモニーでは小学生の歌とダンスをみせてもらいました。小学生も英語を使って自己紹介やダンスへのつなぎをしていたことに驚きました。

オープンセレモニーをおえて、“防災意識を高める”をテーマとしてプレゼンテーションをしあいました。私達は、日本は高齢化社会なので“私達が高齢者にできること”を発表しました。インドネシアは子供が多い国なので“子供たちにできること”を発表してもらいました。

学校案内では、ずっと話しかけてくれてたくさんのことを教えてもらえました。音楽室にはインドネシアの伝統楽器がありました。演奏の仕方を教えてもらってインドネシアにいった全員で一緒に演奏することができました。マダニアの高校生の伝統音楽を習っている生徒達の演奏も聞かせてもらえました。島々が集まっているインドネシアは島によって伝統の音楽も違い、私達が演奏をさせてもらったのはバリ島の音楽でした。揺さぶってならす楽器や小さい琴などもおいてあり、いろいろ触らせてくれました。私が演奏した後にharuna!!nice!など声をかけて褒めてくれました。私は人見知りなのですが、みなさんフレンドリーに接してくれてとても楽しかったです。

日本語、中国語、ドイツ語を選択して学んでいると教えてもらい、日本語の教室にはいらせてもらいました。中では、小学生が学んでいました。壁には日本語で書いた家族の紹介文や習字を貼っていました。日本人の ALT の先生がいらっしゃいました。お話が出来てうれしかったです。

図書室が 2 部屋あるなど、とても大きくて広い学校でした。校舎はカラフルな色で小学校、中学校、高校が分けられていました。日本の学校とは風景が違いとても新鮮でした。

インドネシアの伝統料理の飲み物と食べ物を作ってくれました。飲み物は見た目におどろきましたが二つともおいしかったです。

正直、私はインドネシア研修の中で学校交流が一番不安でしたが、私のつたない英語でもわかってくれ、本当に親切な方ばかりで想像とは裏腹にとても楽しくてあっという間に終わってしまった一日でした。

インドネシアの文化と歴史にふれてとても充実した研修でした。なかでも学校交流が特に楽しくいい思い出になりました。マダニア高校の生徒はみんな英語がペラペラで、自分のレベルの低さを痛いほど実感しました。発表も案内も質問もすぐに英語で言え、長くしゃべり続けられていたのが、本当にすごくて私も話せるようになりたいと刺激を受けました。聞きたいことがあってもすぐに言えなかったり、移動の

飛行機や町中でも話しかけてもらえる機会があったのですが、すぐに会話がおわったりしてふがいなさを感じました。日本の案内には英語、中国語、韓国語の表記がありますがインドネシアにはなかったので、困った時の共通語である英語の大切さを実感しました

インドネシアではいろんなことに挑戦しようと思い、いつもより積極的に行動しました。マダニア高校では料理のお手伝いに参加したり、見た目で判断せず食べたり、質問をしたりしました。質問をしてさらに知識が増えたり、はじめて食べるものは口に合わなかったりするけど、すごく美味しいものにも出会えたり、yes と答えると新たなことを発見する機会になることを知りました。

この研修では、一緒に行った一年生をはじめ、インドネシアでもたくさんの人と話せて人と関わることの楽しさに気付きました。

（2 年 2 組　塩崎　陽菜）

【5～6 日目　国立博物館、モスク、モナス～帰国】

5 日目の主な活動は、国立博物館、モスクとモナスへ訪問することでした。国立博物は、考古学、民族学、歴史、地理の博物館です。

博物館に入場すると、仏教とヒンドゥー教の仏像が展示されていました。展示されていた仏像の中で、私は初めて顔が傾いている仏像を見ました。ガイドさん曰く、右に顔が傾いていると不真面目で、左に顔が傾いていると真面目な仏像だそうです。日本にいて、顔が傾いている仏像やそれぞれの性格などを示しているものは見たことがなかったので、おもしろい発見となりました。仏像は、体型や顔などの見た目が 1 つ 1 つ異なっているだけではなくて、性格も異なっていることを知りました。

民族学と地理に関係する、とても大きなインドネシアの全領土を表す地図と民族の顔写真が展示されていました。民族によってそれぞれの顔立ちが異なっていて、私はその時に「民族の多様性」を実感しました。インドネシアは、17000 の島があり、9000 島は都市があり、8000 島は植物、中には砂だけの無人島からなっています。東側の島は、電気が通っておらず、昔の民族の形がそのまま残っているとガイドさんが説明してくださいました。また、彼らは選挙権を持っていないそうです。民族の顔写真には、カラフルな羽などがついた帽子などを身につけていたり、鼻に長い針のようなものを突き刺していたりしていて、怖いと感じたけれども、そのような民族が近代化の進んでいる世の中でまだ実在することに感動しました。他にも、昔の建物の模型、化石化した人間の脳や、ミイラを近くで見ることができ、インドネシアの歴史を深く学べた貴重な時間を過ごす事が出来ました。

次に、イスラム教の礼拝堂であるジャカルタのモスクを訪れました。このジャカルタのモスクは世界最大のモスクと言われて、実際にとても大きくて広く、人も多かったです。ガイドさんがインドネシアの人口の 90%がイスラム教を信仰していると説明してください

ました。事前に調べていましたが、モスクへ訪れていた現地の人が多かったことからその事をより実感することができました。モスクの祈りの場は男性と女性で分けられていました。これは男性が集中するためだそうです。私がモスクで印象に残っていることは、イスラム教を学ぶための学校があったことです。

私たちが訪れた時には、アラビア語を勉強している小学生の女の子たちがいました。アラビア語はとても難しいイメージがあるので、小学生が勉強するなんてとても驚きました。また、宗教を信仰するためには、その宗教に関する学習をしなければならないという風に感じられました。モスクの出口で、現地の人に日本語で話しかけられました。空港や学校以外で初めて日本語を話す人に出会い、アラビア語も日本語も話せるなんてすごいなとそこで感動しました。

次に、モナスを訪れました。モナスは、独立戦争当時のインドネシア国民の闘志を象徴する建物です。建物のデザインはすべてデヴィ夫人の旦那さんのスカルノ大統領がデザインしたとガイドさんが説明してくださりました。中では、インドネシアが独立するまでの流れがジオラマで再現されており、下にインドネシア語と英語で説明されていました。ガイドさんがひとつひとつを説明してくださいました。インドネシアの歴史も触れることができた時間でした。これらの活動の後は、空港へ行きました。

6 日目は、日本への移動でした。インドネシアでの思い出を振り返り、もっと時間が欲しいなと感じたり、少し寂しさを感じたりもしました。全体を通して、自分が大きく成長できた研修になったと思います。

インドネシア研修に参加して、私はさまざま異文化を体験し、学ぶことができました。日本にはない文化や習慣を体験する時に、抵抗心が残ってしまっていたり、驚いてしまったりしてしましまいましたが、そこで「異文化を理解する」力が必要だということを実感することができました。とても貴重な経験になったと思います。また、日本にはない食べ物や植物、楽器などの伝統に触れることができ、とても嬉しかったし、楽しかったです。

私がこの 5 日間の研修で最も自分が成長したと感じたのは、1 日目の JICA と ERIA 訪問です。JICA や ERIA の防災の取り組み、インドネシアの防災について JICA の講演や事前学習で調べたことより一層深く、学ぶことができました。また、最近ニュースなどでもよく取り上げられている首都移転の原因の元となる地盤沈下の発生する原因やその取り組みについて学びました。とても興味深く、楽しく学習することができました。

インドネシアは災害が日常茶飯事すぎて、災害が発生して被害が出るということは当たり前になっていると知りました。私はこのような考えでは被害を最小にできないと考え、また、自分が思っていたよりも防災意識の向上が必要だと考えました。インドネシアには日本の様な災害発生時の避難を呼びかける警報などを作る技術がないため、より防災意識が必要になりますが、インドネシアは国の発展を優先したいため、あまり防災にお金をか

けないと聞きました。私はこの研修で、インドネシアのような防災も大事だが国の発展をより望む国に対して防災意識を高めるためにどのような取り組みができるかを考えたいです。そのためにまず、彼らが災害で被害が出るのは当たり前だと考えないようになるためには、どのような取り組みが自分にはできるのかを見つめていきたいと思います。

防災について詳しく知りたいと思いこの研修に参加した私にとって、JICA、ERIA 訪問はとてもいい勉強になり、貴重な時間を過ごすことができました。

この海外研修で、5 日間でも自分成長を感じることができました。これまでになかった積極性を持つようになり、自分の持つ視野をより広げることができた研修になりました。この研修を活かして、今後の自分の国際的な関心をより深めていきたいです。

（1 年 3 組　浜本　乃愛）

カナダ研修

1. 目的

(1) 異文化コミュニケーション、異文化理解に関する見識を深める。

プログラム① 現地高校生との交流

プログラム② インタビュー調査を主とするフィールドワークの実施

(2) 日系カナダ移民の歴史について学修を深める。

プログラム③ 現地和歌山県人会にて、日系カナダ人からの聞き取り調査及び交流

プログラム④ バンクーバー市近郊の日系博物館の見学

(3) 生徒自らの主体性を涵養する。

プログラム⑤ 生徒自らが計画実行する「自主研修」の設定

2. 日時

2019 年（令和元年）10 月 27 日（日）―11 月 1 日（金）　　（現地 4 泊、機中 1 泊）

3. 研修先

カナダ・ブリティッシュコロンビア州（バンクーバー市、バーナビー市、リッチモンド市）

4. 事前・事後研修

(1) 事前研修①　英語研修：夏期休暇中 6 回

(2) 事前研修②　プレゼン準備、自主研修計画、インタビュー準備：9 月－10 月放課後

(3) 事後研修　　研修総括、プレゼン準備、報告書作成：11 月－2 月

5. 研修団

参加生徒：1 年生 2 名、2 年生 6 名 計 8 名

引率教員：2 名

6.　主な訪問先

(1) リッチモンドセカンダリースクール　Richmond Secondary School

(2) 和歌山県人会　Steveston Community Centre

(3) 日系博物館　Nikkei National Museum & Cultural Centre

(4) グランビルアイランド　Granville Island

(5) イングリッシュベイ　English Bay

7. 研修日程

日次	月日 (曜)	地名	現地時刻	交通機関	内容(宿泊地)
1	10 月 27 日 (日)	関西空港発 成田空港着 成田空港発 バンクーバー 空港着	14:05 15:25 18:40 11:45	GK204 JL018	① バンクーバー市内見学 (1) ギャスタウン (2) スタンレーパーク （バンクーバー泊）
2	10 月 28 日 (月)	バンクーバー リッチモンド	終日	公共交通 ・メトロ	① 学校交流 Richmond Secondary School (1) 授業参加 (2) プレゼン （日加教育比較） (3) 生徒交流 （昼食、校内散策） （バンクーバー泊）
3	10 月 29 日 (火)	バンクーバー リッチモンド バーナビー	終日	専用車	① 和歌山県人会訪問 (1) インタビュー (2) 交流 ② 日系博物館見学 （バンクーバー泊）
4	10 月 30 日 (水)	バンクーバー	終日	公共交通 ・市バス ・メトロ	① 自主研修 (1) インタビュー調査 「捕鯨」「ゴミ問題」 (2) アンケート ② 散策 グランビルアイラン ド、イングリッシュベイ （バンクーバー泊）
5	10 月 31 日 (木)	バンクーバー バンクーバー 空港発	午前 14:15	専用車 JL017	ホテル出発 （機中泊）
6	11 月 1 日 (金)	成田空港着 成田空港発 関西空港着	16:25 20:00 21:40	 MM318	乗り換え 関西空港着後解散

【事前学習～初日】

僕は 10 月 27 日から 11 月 1 日までカナダ・ブリティッシュコロンビア州・バンクーバー市へ研修に行きました。この研修は、カナダで移民や英語などの文化について学び、研修で得た知識や経験をしっかりと自分の物にし、日高高校生に伝えること、これが大きな目的です。そのため、僕たちは研修に行く前に、カナダについての知識を深めるため、文化などについて調べ、夏休みには ALT のジェームズ先生と英語でのコミュニケーションの勉強をしました。現地でのコミュニケーションは常に英語なので、これらの取組はとても大切だと研修後に改めて感じました。夏休みが明けてからは、現地で発表するプレゼンの準備に取り掛かりました。プレゼンで発表する内容はもちろんですが、発表する時に使う言語はもちろん英語なので、使う単語一つ一つの意味をしっかりと調べ、文を構成し、予想される聞き手からの返答や質問について考え、プレゼンがスームズに進むためにメンバー全員で試行錯誤を繰り返しました。時には、クラブ終わりに参加し、１９時過ぎまで学校に残り、作業に取り掛かることもありました。成功させられるかなどの不安もたくさんありましたが、メンバー全員で力を合わせ、無事完成させることが出来ました。

そして 10 月 27 日、僕たちは期待と不安を胸にカナダに向けて日本を出発しました。飛行機は約 10 時間と長いフライトでしたが、映画を見たり勉強をしたりと、この長い時間を有効に使うことが出来ました。カナダ・バンクーバー空港に到着し、出発前から不安だった入国審査を無事に終え、ガイドさんと合流し、バスに乗り空港を出発しました。道中では、車窓から街並みを見学しました。ガイドさんがカナダの文化や有名な建築物などについて説明し、教えてくれました。特に僕が印象に残っているのは、カナダは羽生結弦選手や浅田真央選手等たくさんの日本の有名人が訪れているということでした。このようなお話お聞き、カナダの知識を深めながら僕たちはダウンタウンにあるスタンレーパークに向かいました。ここはまさに緑のオアシスであり、パーク内にはカナダ最大の水族館、美しいガーデン、トーテムポール、展望スポット等があり、海岸沿いには 28 ㎞の遊歩道シーウォールが整備されています。ここでは、トーテムポールで記念撮影をし、美しい自然や海岸沿いの景色を堪能しました。また、近くのお土産店でカナダでは初めてのショッピングをしました。スタンレーパークはとても広いため、ほんの一部しか行くことはできませんでした。しかし、短い時間でも十分楽しむことができました。

その後、日本のバラエティー番組などで取り上げられたこともある、ギャスタウンの有名な蒸気時計を見に行きました。その蒸気時計は 15 分おきに汽笛が鳴る不思議な時計でした。また、日本とは全く違うレンガ造りの建物で構成された街並みに圧倒され、何度も写真を撮りました。その後、僕たちは高台からバンクーバーの自然の景色を堪能し、ホテルに向かいました。初日は初めてのことばかりで、心が落ち着く時間が無いほど有意義なひと時を過ごせました。

（2 年 5 組　萩平　隆也）

【２日目】

２日目のこの日は Richmond Secondary School を訪れました。現地に着くと、生徒たちも登校していました。まず日本語のクラスに案内してもらい、ペアの子と一緒に授業を受けました。カナダには HR 教室というものはなく、ロッカーが各個人の机のようになっており、先生がいる教室に自分が移動するというスタイルでした。私の受けた最初の授業は、“CLT”という主に人間関係を学ぶ授業でした。今回の授業の中身は SNS でどういう風に人と関わっていくのか、それをみんなで議論しました。私もペアの子に手伝ってもらい、授業に参加しました。そうする内に、日本では見られないような、スマホを触っていたり、お菓子を食べていたり、私服で登校するという姿が授業の中に根付いていることに気付きました。それは悪いことなのではなく、個人が自由に自分のスタイルで受けるというものでした。それと同時に感じたのは、カナダの人種の多さでした。私は最初、カナダは白人やヨーロッパ系の人種が多いのかなと思っていたのですが、アジア圏内の人種が多く、さらに日本人とのハーフやクオーターの人もいてとても驚きました。授業は終盤に差し掛かり、先生と DVD を鑑賞しました。

授業後、みんなと合流し、日本語クラスに戻ると早速交流を行いました。自己紹介はもちろん、英語でのゲームやウォームアップをしました。現地学生も日本語を使って会話してくれ、とても楽しかったです。その後に自分たちが作ったプレゼンテーションを行いました。テーマは日本の教育問題で、それを説明し、最終的には討論しました。この場面でもカナダの生徒目線から積極的に意見を言ってくれて、とても討論のしがいがありました。終わったら昼休みに入り、先生がピザを出してくれて生徒全員で食べました。その際にもカナダの生徒と会話し、楽しい時間を過ごせました。

次は学校案内をしてくれました。本当に色んな人種の人がいて、とても驚きました。廊下で私を見るとみんな挨拶や話しかけてくれ、積極的に交流しました。その後はまた違うペア

の子のクラスで英語の授業を受けました。授業の内容はやはり難しく、到底ついていけないものでした。授業形式は日本とは真逆で先生が真ん中に立ち、それを生徒が囲む形式でした。やはり先生の立ち位置や生徒の受けやすい授業環境がもうそこにあるのだと感じました。

交流を通して気付いたことは、教育環境のよさと、人種差別のない「平等」という意識でした。授業は、生徒たちの自己発信を高めていくというスタイルで、人として生きていく上で大切だと教えているのがわかりました。ここで学んだこと、気付いたことはこの先とても重要なことだと思います。この体験を私は将来に活かしていきたいです。

（2 年 2 組　芝中　彩華）

【３日目】

私たちは 3 日目の午前中に和歌山県人会を訪問しました。ここでは、県人会の方々が経験したことを主に話を伺いました。カナダに移民してきて最初のころは人種差別を受けたこと、第二次世界大戦が起き、カナダが日本を敵国とみなしたため、カナダにいた日本人は強制収容所にいれられたことなど、貴重な体験談を聞くことができました。また、どこで死んでもいいという強い覚悟をもって船でやって来た方や、結婚がきっかけでカナダへ来た方など、移民をするきっかけは人それぞれで、特に結婚などは自分たちにも身近に起こりうることなので心に印象強く残りました。

そして私たちは県人会の方々に「日本は今後より多くの移民を受け入れた方が良いと思うか」という疑問をぶつけてみました。すると県人会の会長である林さんが「受け入れ、というよりも自然と増えていくのではないか。日本は労働者が減少している今、増える流れになっていく」と答えてくれました。“自然と増える”という返事は私の中では予想していない答えだったので、衝撃を受けました。また移民のことでは日本に問題があり、日本に来てくれた移民の人に農業のことを教える指導者が少なく、そこに少子化という問題も関連してくるということも教えていただき、新たな方向から移民について考えることもできました。

午後からは日系博物館を訪れ、日系カナダ人の歴史について触れました。戦時中の日本人の様子を書いた本や作品を見て回ることができました。

夕方、バンクーバー美術館を訪れ、近代的な作品を見て回りました。日本とは違う感性を味わうことができ、貴重な時間でした。

この日は、移民について深く考えられるとても充実した 1 日でした。県人会の方々との話で、自分たちとは違う考えを持っているから、自分の考えが改められるきっかけとなったので、意見を交えあい質問をするということの大切さに

身をもって気付くことができました。学んだことを日常生活の中で生かしていきたいと思いました。

（2 年 5 組　本間　愛子）

【4 日目】

4 日目は、「海洋プラスチック問題」と「捕鯨問題」について街頭インタビューをしました。2 つの問題について共通していることは「海」ということで、漁港に行けば詳しく話を聞けそうだと思い、午前中は電車とバスを使ってスティーブストンに行きました。1 テーマにつき最低 50 人を目標にインタビューを始めました。また、4 人ずつだったグループをさらに分け、ペアを作り、効率よくインタビューするようにしました。しかし、平日の午前中だったからなのか、人が少なく、私のグループでは 10 人にしかインタビューできませんでした。そこで、場所を変えて、沢山のお店があり人が多く集まるグランビルアイランドに行くことにしましたが、その前にせっかくスティーブストンに来たので、村上ハウス（村上さんという方が住んでいた家を再現したもの）に行くことにしました。そこでは、缶詰工場や造船所で働いていた日本人が当時使っていたベッドや家財道具が展示されていました。村上ハウス周辺には日本人の歴史について書かれた看板などがたくさんあり、時間がなかったので見られませんでしたが、もっと見たかったです。その後グランビルアイランドに行き、昼食を取り、インタビューを再開しました。人が多かったので、インタビューできるだろうと思っていましたが、買い物で忙しい人が多く、私のペアは２人にしかインタビューできませんでした。他のペアもうまくいかなかったので、イングリッシュベイに行きました。そこではくつろいでいる人が多く、とても話しかけやすい環境でした。中には、「一緒にベンチに座ろうよ」と声をかけてくれたり、「インタビュー頑張ってね」と言ってくれたりした人もいて、とても優しさを感じ、ノルマ達成を目指して頑張ろうという気持ちが更に強くなりました。無事、各グループがノルマ達成し、みんなで集まった頃には、日が沈みかけていました。２グループ合わせて計 100 人にインタビューするというノルマを達成できた時の嬉しさは忘れられません。ホテルに戻り、その後は近くのスーパーやジャパドッグで食料を買い、お疲れ会をしました。

インタビューの内容について、カナダ政府が使い捨てプラスチック製品の禁止を発表したことを知らない人が約半分いて、驚きました。また、それに対して賛成の人が全員でしたが、子供がいる家庭ではストローなどが必要なので、少し不便と言っている人もいました。

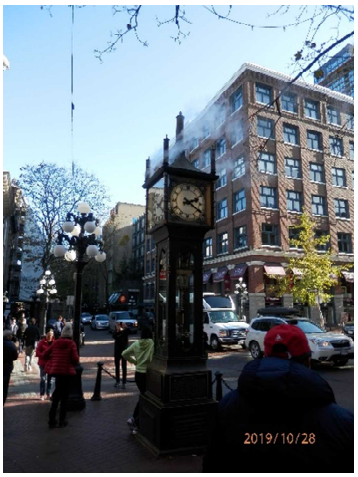
プラスチックごみを減らす取り組みは日本と同じでしたが、マイボトルを使っている人がとても多かったです。インタビューを通して、沢山の事を知ることができましたが、今後それらをまとめるだけではなく、良いと思った考え方や取り組みは共有したり、行動に移したりしていけたら良いなと思います。

4 日目全体を通して、インタビュー以外の事でも自分から声をかけることができたように感じます。特に、バスの運転手さんに行き方を聞いて理解できた時はとても嬉しかったです。また、今まで海外に行った時は、人を見た目だけで「話しかけづらい」と感じる事がよくありました。しかし、勇気を出してカナダでも同じような人にインタビューすると、とても優しく、質問に丁寧に答えてくれました。このような出会いが沢山あったので、インタビューをしていくうちにその思い込みが少しずつなくなっていきました。これを機に、知らない人に話しかけることに対しての不安がなくなり、駅やスーパーなどで積極的に話しかけている自分がいました。インタビューという機会がなかったらこのようなことはなかったので、とても良い経験になりました。

（1 年 6 組　小早川　えりか）

【全体感想①】

僕は、今回のカナダ研修に参加させて頂いて、「実際に」体験する事がどれだけ重要で、驚きや感動に満ちているか、自分の見聞を増やせるか、痛感しました。カナダ研修に行く前、カナダに対する印象は、国土が広く、移民が多い多民族・多文化な国、そして平和な国というまだまだぼんやりとしたものでした。また、英語に対する不安が拭い切れていませんでした。しかし、事前学習としてカナダについて沢山の資料を見て、美浜町三尾のカナダミュージアムを訪れ、徐々に印象は確固たるものへ変化していきました。そして降り立ったカナダ本土では、まず学校教育に驚かされました。世界トップクラスと呼ばれるカナダの教育現場では、日本より断然自由な雰囲気を感じました。僕たちが交流した日本語クラスの生徒たちは、僕の拙い英語でも聞こうとしてくれたり、学校案内をしてくれたり、とても優しく接してくれました。また、日本の教育とカナダの教育について討論した時も、積極的に意見を述べていて発言力の違



いを目の当たりにしました。中には、日本語がとても上手な生徒がいて言語の壁は学校訪問では乗り越える事が出来ました。しかし、討論結果を最後にうまく英語でまとめる事が出来ず、更に語彙力や対応力を鍛える必要性を感じました。授業は、日本でもするような植物の細胞を観察するものでしたが、生徒たちで助け合い、自主的に進めていくような形式で、日本でも徐々に取り入れていくべき手法だと思いました。

次に、この研修のテーマである移民について、和歌山県人会でお話を伺うと、現在では多くの移民を受け入れているカナダですが、日系移民一世のみならず、戦後移民された方々も、当初は差別的な出来事があったようで、やはり移民の皆さんは大変な苦労をされたのだと改めて考えました。苦労された移民の皆さんの努力で、現在のカナダ社会があるのだとも思いました。そして、この訪問で最も印象深かったのは、「自分の長所を信じて磨いてゆけば壁は乗り越えられる」という県人会の方のお言葉です。言葉や文化の壁も、自分の誇れる部分を活かせば、乗り越えて、働いて、生きていける、とご自身の経験からアドバイスをして下さったこの言葉はとても深く僕の胸に刺さりました。

言語の壁、僕にはこの壁が最終日まで付いて来ました。街頭インタビューのノルマである 50 人はかなり重くのし掛かりました。時には挫けそうになりました。しかし、前日の県人会の方のお言葉を胸に、積極的に臨むと、カナダの方はとても優しく、真剣に答えて下さいました。言語の壁は、破ることが出来るのです。少しの勇気と多くの伝える意志があれば―。

最後に、カナダは平和な印象でしたが、地図には行かない方が良いと記された通りがあったり、ホームレスの人が路上にいたり、落とした財布も返って来ません。そんな、治安面の厳しい状況も目の当たりにしました。しかし、一方の日本は移民に関する重要な転換点を迎えています。移民先進国カナダの現状は、厳しい面もありますが、俯瞰して見ると、移民を受け入れて、社会はしっかりと成り立っています。日本はカナダを参考に、見習うべきではないかと僕は思います。カナダで「実際に」体験した事は僕に今後の日本の姿を考えさせてくれる貴重な経験になったと誇りに思っています。

（2 年 5 組　古部　了大）

【全体感想②】

このカナダ研修での 5 日間、多くの知識を得たとともに、自分にとってとても大きな経験になったと思います。研修に行くまでは、英語が通じなくて現地の人々とコミュニケーションが取れなかったらどうしようとか、食べ物が合わなかったらどうしようと不安がたくさんありました。でも実際に行ってみるとカナダはとても素敵なところで、街並み、景色、人々の親切さ、すべてが魅力的で不安など無かったかのような有意義な時間でした。

私がカナダ研修を通して印象に残っているのは、現地高校生との学校交流と、自主研修での街頭インタビューです。学校交流では、現地の高校生と一緒に授業を受けたことで刺激をたくさん受けました。自分の意見や答えの間違いを恐れず発言したり、友達と意見を言い合ったりと日本では珍しい光景が当たり前のように行われていることに感動しました。英語での討論は情熱的ですごかったです。カナダの高校生は勤勉で、大量の課題もきちんとこなしているそうです。その様子を見て、私も頑張らないといけないなと思いました。英語での授業が難しく、理解するのに困っている私を、日本語クラスの子が気にかけてくれて親切に説明してくれたのも嬉しくて印象的でした。この日本語クラスの生徒達と 1 日一緒に過ごして、放課後は近くのショッピングモールの案内までしてくれました。この出会いを大切にし、これからも交流を続けていきたいです。自主研修での街頭インタビューは正直とてもしんどくて辛かったです。思うように人がいなかったり、インタビューを断られたりすることもありました。それでもメンバーと励ましあいながら、日が暮れるまで諦めずに頑張り、目標人数を達成した時の嬉しさと達成感は忘れられません。この経験があったからこそ、カナダメンバーの絆がより深いものになったのだと思います。これらを通して 1 番感じたのは、自分の英語力とコミュニケーション力の低さです。相手の話している内容が理解できても、自分の意見や思いを伝えることが難しかったです。自分は英語が得意ではないので、国際的な場で活躍している先輩にアドバイスをいただいたりして少しは勉強しているつもりだったけれど、まだまだだなと痛感し、もっとやる気が湧きました。

この 5 日間を通して、何かに挑戦することの大切さ、英語を話すことの難しさと楽しさを学んだとともに、自分の視野が少し広がった気がします。研修で得た経験と反省を生かし、もっと視野を広げて自分の力にできるよういろんなことに挑戦し成長していきたいです。

（2 年 3 組　市川　美海）

【全体感想③】

私がこの研修に応募しようと思ったのは、私の祖先が移民としてカナダに行っていたことを知り、カナダ研修のテーマである「移民」について調べてみたいと思ったことがきっかけでした。でも、三日目に県人会の方に話を聞くと、私が想像していたよりももっと過酷な状況でした。写真結婚という、写真でしか見たことの無い男性と結婚していた日本人女性が多くいたこと、太平洋戦争でお金も持ち物もすべて奪われ、家から追い出され、収容所に入れられていたこと、でもまた戻り頑張ったこと、インターネットには書かれていない当時の厳しさが分かりました。そしてカナダは平和で綺麗な街だと聞いていたけど、日本の野球チームが使っていたグラウンドには、たくさんのホームレスの方がいたことに驚きました。そのグラウンドでは例年日本のお祭りのようなものが開かれていたけれど、日本人が追い出されたように、ホームレスの方を追い出すことはしたくない、とその場所では開催しなかったこと、今でも昔のことを忘れないように取り組んでいることも、すてきだと思いました。

そして何より、わたしが一番学んだのは英語が合っているかどうかでは無く、自分から積極的に話すことが大切だと言うことです。ガイドさんが言っていた、「誰もほかの国から来た人が英語を喋れるなんて思っていないから話してみると良い」と言う言葉がなんとか挑戦できるきっかけになりました。カナダに行く前は、英語を喋ることに不安があって四日目の街頭インタビューなんて出来るはずないと思っていました。でもガイドさんが言ってくれていたように、カナダの人は、なんとか分かる単語をつなぎ合わせただけの英語を聞き取ろうとしてくれて、これが移民大国の受け入れ体制だとわかりました。

この研修を通して、実際に行ってみたり、聞いてみたりすることの大切さと、難しさ、楽しさがわかりました。この何も分からない状況から日本を出てカナダに行き、頑張った日本人の歴史があると言うことを伝えるのが私たちの役目だと思うことが出来ました。口に合うご飯が無くて、帰りたいと思ったこともあった研修だったけど、現地の高校生が私

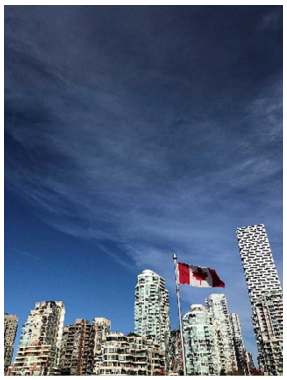
たちのことを全力で楽しませてくれたこと、お土産屋さんや街の人たちの優しさ、にとても支えられました。そんな国境を越えた人のつながりの素晴らしさを感じることが出来た良い経験になりました。

（2 年 1 組　川島　梨嵯）

【全体感想④】

今回のカナダ研修で、私は移民、教育、プラスチックごみ問題について学びました。

現在、日本では移民の人達に対してマンションの入居を拒否するなどの差別問題があるというニュースを見て、実際に多くの移民を受け入れ、多文化が共生しているカナダで、移民について理解を深めたいと思いました。県人会に行くとカナダで様々な活動をされている日系カナダ人のお話を聞くことができ、その一つ一つの言葉が心に染みました。日系ミュージアムに行くと、移民の歴史、彼らの苦労、そして現在の日系移民の素晴らしさなど、移民の奥深さが伝わってきました。移住した先で一生懸命頑張って、その国に素晴らしい影響を及ぼした移民がたくさんいることも分かりました。だから私は日本もより多くの移民を受け入れ、もっと世界と結びつきが強いグローバルな国になってほしいと思いました。



街頭インタビューをすると、カナダの人達は日本人よりプラスチックごみ問題について関心を持っていて、実際に解決に向けて行動を起こしている人が非常に多いことを知りました。この問題は深刻で世界共通の問題なので、日本も今以上に対策をとるべきだと思いました。そのため、まず自分が買い物にはマイバックを持って行く、ストローは使わないなど小さなことから行動しようと思いました。

現地の高校の授業では、先生も生徒もお菓子を食べていたり、生徒が何度も質問をしたりして深く学んでいて、とてもいい雰囲気でした。グループで教育について話し合いをした時も、現地の高校生はどんどんたくさん自分の意見を言っていました。日本の生徒とカナダの

生徒では、積極性に大きな違いがあることが分かりました。

今回のカナダ研修に参加して、現地の方々と英語を使ってコミュニケーションをとりながら深く学ぶことができ、新しいものをたくさん見て、とても良い刺激になりました。そしてその分、自分に足りない部分もたくさん見えました。英語力ももちろん大切ですが、カナダへ行って英語力が全てではないことが分かりました。たとえ英語が完璧でも自分の考えや思ったことを伝えられる力がないと意味がありません。だからもっと自分には積極性や自発力が必要だと思いました。それは、少し勇気のいることだと思いますが、グローバル化が進む今、私たちが大人になった時、必ず必要となってくる力だと思います。

今回の経験を将来に生かせるよう、これからも努力し続けようと思います。カナダ研修ではたくさんのことを発見し、学ぶことができ、自分の視野を広げることができ、とても貴重な経験になりました。

(1 年 2 組　湯川　未結)

ベトナム研修

1. 目的

(1) プラスチックをリサイクルするベトナム工芸村他、関連施設を訪問する。日越両国の「プラスチック問題」への取組を学ぶことで、持続可能な社会実現のためにできることを考える。

プログラム① ハノイ市ゴミ処理場及び大型商業施設のゴミ対策状況を視察する

プログラム② ベトナムのプラスチックリサイクルの取組を学ぶ

プログラム③ 御坊市地元企業のペットボトルリサイクルへの取組を学ぶ

プログラム④ JICA の活動を理解する

(2) 地元企業と連携した学校内のペットボトルリサイクルに関する取組を現地で紹介し、現地高校生と協働学修を行う。

プログラム⑤チャンフー高校生との協働学修と交流

(3) 研修期間を通してコミュニケーション力を磨き、自国文化および異文化への理解を深める。

2. 日時

2019 年（令和元年） 11 月 4 日（月）— 11 月 9 日（土） （現地 4 泊、機中 1 泊）

3. 研修先

ベトナム・ハノイ、ホーチミン

4. 事前・事後研修

(1) 事前研修① 共通研修：7 月に 2 回（心構え、発表練習他）

英語研修：夏期休暇中に 8 回（FLT による研修）

共通研修：2019 年 10 月 1 日（県指導主事による英語プレゼン研修）

(2) 事前研修② テーマ理解とプレゼン準備：8 月～11 月計 5 回

大洋化学での研修：2019 年 10 月 11 日、25 日計 2 回

(3) 事後研修 研修総括、報告書作成、ポスター作成および発表：11 月-3 月

第 7 回全国海洋教育サミットでの成果報告：2020 年 2 月 15 日

5. 研修団

参加生徒：2 年生 8 名 計 8 名

引率教員：2 名

6. 主な訪問先

(1) ゴミ埋め立て処分場　Soc Son Landfill

(2) プラスチックゴミ再生村　Recycling Village in Minh Khai

(3) チャンフー高校　Tran Phu High School

(4)　JICA ベトナム事務所

(5) イオンモール・ビンタン　AEON MALL Bình Tân

7. 研修日程

日次	月日 (曜)	地名	現地時刻	交通機関	内容(宿泊地)
1	11 月 4 日 (月)	関西空港　出発 ノイバイ空港着	10:30 14:00	VN331 専用車	①移動 ②市内見学 (1) 玉山神社、文廟 （ハノイ市内泊）
2	11 月 5 日 (火)	ソクソン県 ミンカイ村 ホテル付近	08:00 09:20 14:30 16:30	専用車	和田秀樹氏と合流 ①ゴミ埋め立て地 (1)概要説明講義 (2)現場視察 ②プラスチック村 (1)視察と講義 ③廃品改修店 (1)視察と講義 （ハノイ市内泊）
3	11 月 6 日 （水）	ハイフォン市	10:50	専用車	①チャンフー高校 (1)協働学修「プラスチックゴミ問題」日越相互プレゼンとディスカッション (2)昼食交流 （ハノイ市内泊）
4	11 月 7 日 （木）	ハノイ市 ノイバイ空港発 ﾀﾝｿﾝﾆｬｯﾄ空港着	09:10 14:00 16:15	専用車 VN239	①JICA ベトナム事務所 (1)国際協力に関する講義とディスカッション （ホーチミン市内泊）

5	11 月 8 日 （金）	ホーチミン市	11:00	専用車	①ｲｵﾝﾓｰﾙﾋﾞﾝﾀﾝ (1)企業のゴミ問題への取組講義 (2)質疑応答、店内ゴミ集積所視察 ②市内見学 (1)市庁舎、展望台 （機内泊）
6	11 月 9 日 (土)	ﾀﾝｿﾝﾆｬｯﾄ空港発 関西空港　到着 解散	00:25 07:30 08:20	VN320	 入国手続き後、解散

【事前研修①　大洋化学の取組】

プラスチックゴミ問題に取り組むにあたり、私たちは地元企業の大洋化学株式会社で２日間にわたり研修させていただきました。大洋化学株式会社の本社は御坊市に、工場は美浜町にあります。1954 年に創立され、全国 4 カ所に支店や工場があります。1992 年には中国に、2013 年にはベトナムに海外進出も果たしています。

大洋化学では、和歌山県の小学校、中学校、高校からの空の分別されたペットボトルを回収し、プラスチックのお皿、コップ、フォーク、スプーンなどに作り替えています。皆さんが良く知る小学校で使うお盆も、モスバーガーで使われている緑色のトレーも全て大洋化学が加工した、私たちが分別した空のペットボトルからできているのです。

私が一番驚いたのは、大洋化学が日本で一番初めにユリヤ樹脂を使用した麻雀パイと麻雀卓を開発したことです。大洋化学の麻雀パイ、麻雀卓は有名で、インターネットで「大洋化学」と検索すると、麻雀パイの画像がたくさん出てきます。実際に大洋化学本社で行われた研修では、ペットボトルからリサイクルされた製品がたくさん並んでいて、様々な製品に作り替えられていることを知りました。食器や麻雀パイなど以外にも LED 照明の製造や野菜工場も持ち、その LED 照明を使ってわさびを栽培しているとおっしゃっていました。

美浜町にある工場では、ペットボトルから新しい製品に作り替える工程を見ました。御坊清掃センターで回収してきた大量のペットボトルは、リサイクルして使えるものと使えないものに分けられます。それをきれいに洗い、大洋化学の工場に運びます。そこで運ばれてきたペットボトルを一度粉々にして熱し、柔らかくしてから細長い紐状にします。そしてそれをまた細かく切り、ペレットというプラスチックの再生樹脂にするのです。ペットボトルをペレットにするとそこからたくさんの種類の製品に作り替えられます。

このように大洋化学では、県内たくさんの学校からペットボトルを集め、それを工場で一度粉々にして製品を作り、再資源化・再製品化に取り組んでいます。

（2 年 1 組　小松　智加子）

【事前研修②　日本や世界のプラスチック問題】

プラスチック問題には 2 つの問題があると私は考えます。1 つ目は、プラスチックごみが生態系や私たちの人体にどのような影響や被害を及ぼすかです。今日、海には少なくとも年間約 800 万トンものプラスチックごみが流れ込んでいます。海にはすでに、1 億 5,000 万トンのプラスチックごみがあり、2050 年には魚と同じ量になると言われています。日本でも、プラスチック問題が G20 大阪サミットの主要議題のひとつとして取り上げられており、日本を含む世界のプラスチック問題はとても深刻な状況になっています。これらによって引き起こされる影響は多くあります。例えば、海洋生態系、観光と漁業、沿岸居住環境と船舶です。この中でも海洋生態系が最も深刻です。今、100 種類の動物が死んでいます。その例の 1 つがウミガメです。ウミガメはクラゲと間違って海中に浮かんでいるゴミを食べてしまい、満腹を感じ、餓死してしまうのです。このように絶滅危惧種を含む 100 種が傷つけられて死んでいます。だから私たちはこの問題に目を背けることは出来ないのです。

しかし、これらに対する対策があまりなされていません。これが 2 つ目の問題です。先進国はごみを多く排出しているのにも関わらず、その処分については発展途上国に任せき

りで非協力的だと指摘されています。これではプラスチック問題が更に深刻になる一方です。それを防ぐために、まずは自分の今の生活を見直し、出来ることを考えて行動することが大切なのです。私は自分たちにできる身近なことは何か考えました。それは、レジ袋を貰わないようにすることです。私自身は買い物をしたらついレジ袋を貰うことが多いので、これからは貰わないように意識しマイバックを持参しようと思います。また、レジ袋を有料化するなど、社会全体がもっと積極的にこの問題に対して取り組むべきだと思います。先日、キットカットのパッケージが紙袋になっていることに気づきました。企業による取組がすでに始まっていることを感じてうれしかったです。

プラスチック問題の深刻さは皆さんが思っている以上です。1 人 1 人が関心を持って意識することで事情は変わると思います。生態系の保全のため、私たちが住みやすい環境にするために、小さいことから努力していくことが大切だと思います。皆さんも自分たちの環境作りのために自分できることから実行していきましょう。

（2 年 3 組　武内　優希）

【事前研修③　日高高校生の意識～アンケート結果と分析～】

私達の高校ではリサイクル活動を行っています。その活動とは日高高校と地元企業である御坊広域清掃センター、大洋化学と連携しペットボトルのリサイクルを行うというものです。学校で集められたペットボトルは清掃センターが回収し、フレーク化されます。その後、大洋化学株式会社がそのフレークで食器などの商品を作り再利用しています。

この連携システムを知ったとき、私たちは日高高校生がリサイクル活動にどれだけ取り組んでいるのかを調査すべきだ考えました。そこで日高高校生 100 人にアンケートを実施しました。まず始めに、世界のプラスチックゴミが問題になっていることを知っているのかと尋ねると、知っていると答えた人は 91%でした。次に、ペットボトルを捨てるときどうしているのかと尋ねると、他のゴミと分別している人は 90%、ラベルをはがす人は 88%、リングをとる人は 87%、中を洗う人は 72%という結果でした。

この結果から次のことがわかりました。日高高校生のリサイクル意識は高い。しかし、この行動を何のためにしているのか、自分達が分別したペットボトルはどのような道筋を辿

ってリサイクルされているのかという事を理解していない人が多い。加えて、地域、地元企業と連携してリサイクル活動が行われている事を知らない人も多い。

これらを分析すると、日高高校生はプラスチックゴミへの問題意識が高くリサイクル活動に貢献してはいるが、そこには十分な理解や動機、根拠がないと言えるということが分かりました。そこで私達が今後しなければいけないことは、日高高校生のリサイクル活動への動機付けだと考えました。具体的に、世界のプラスチック問題と日高高校のリサイクルシステムについて描いたポップを使って活動することに決めました。ポップ作製で気をつけたことは、イラストや写真を使い、誰もが分かりやすいように作ったことです。それをペットボトル回収箱の側面に取り付け、日高高校生と教職員にリサイクル活動への理解、動機を根付かせていく計画です。そしてそれを学校内だけでとどめるのではなく、地域、和歌山県、日本、世界に広めていきたいと考えています。それでこそ私達の研修が意味のあるものになると考えています。

今後は、研修の延長線で海洋汚染プラスチック問題について東京で発表する事になっています。そこで今まで述べたことを多くの人に伝えられるように私達は学び続けなければなりません。そして学校、日本、世界の率先者となり、プラスチック問題解決に向けて歩めるような人になることを目標としています。最後に私がこの研修を通して思ったことは、行動を起こすだけでなくそこに動機、理解、根拠が根付くと驚くべき効果が現れるということです。それを根付かせるため今後も活動していきたいと考えています。そして何十年後の世界の未来を明るいものに変えるために、貢献していきたいと思います。

（2 年 5 組　日下　瑞希）

ペットボトルのゆくえ
① 回収される
②工場でペットボトルフレークになる
③大洋化学さんへいく
④お皿やトレイになる!!
このペットボトルは業者さんに回収された後、お皿やトレイになっています。
つぶさずキレイにして捨ててください

大洋化学について
大洋化学（株）　御坊市島にあるリサイクル事業を中心とする会社です。
リサイクルPET原料の食器製品[LauLau]
県内約140ヶ所で集められたペットボトルを御坊市広域清掃センターでペットボトルフレークにし、大洋化学で様々なものに変わっています。
その他にも麻雀卓や麻雀牌などが作られています。

【現地研修①　埋め立て地】

ベトナムでの 2 日目は、私たちのメインテーマである「プラスチックゴミリサイクル」に関する内容を学べた日でした。この日は一番深い内容を研修したといっても過言ではありません。

まず、朝はいつも通りに起き、各自準備を済ませて、誰一人として遅れることなく出発することができました。この日は現地で活動するコンサルタントの和田秀樹さんが一日中私たちの研修をサポートしてくれました。まず、和田さんは「VWP（ベトナムウェストプランニング）」について話してくれました。これはベトナム廃棄物プロジェクトの略です。ベトナムのゴミ問題の特徴の一つに、既存処理場からの環境汚染が問題視されていることがあります。また、ベトナムは家庭から出たごみをそのまま廃棄しているため、日本は 100 年間に 7～8,000 t の排出に対して、ベトナムは 10 年間で 6,000 t ものゴミが処理場に送られている事実などを講義してくれました。

バスで 1 時間ほど移動した後、プラスチック廃棄物処理場に到着しました。そこで、大きく分けて 3 つのことを教えてもらいました。

1 つ目は、ベトナムは日本の技術を利用して最大 4,000 t ものゴミを燃やすことやそれによって発電ができる焼却炉の設立を予定しており、それに対して 1 年に 2 度はゴミ処理場へ近隣住民からのデモがあるということです。ベトナムのゴミ問題における課題は、既存処理場でゴミを燃やすことにより飛灰やメタンガスなどが発生するために起こる環境汚染問題です。また、汚水処理が 1 番難しく、困難だということです。

2 つ目は、課題対策には、悪臭を放たないために消臭剤を使ったり、汚水が雨に流れ出ないようにするためにゴミの上にセメントで膜を作ったり、また少しでも無駄に燃やすごみの量を削減し環境を守るために可燃物か不可燃物かで分別をしているということです。

そして 3 つ目は、市の対策として、道路、河川、鉄道からガス、電話などの生活基盤や社会経済産業基盤（インフラ）を作ること、市内住民の健康調査をすることや建物を建てること、スーパーのレジ袋をナイロンから紙袋に変えることをしているということです。

この研修を通して、日本とベトナムの企業とが協力し合い、ゴミ処理や汚水処理などを行っていることを学びました。今日両国が陥っているゴミ問題についての知識を深め、今よりもっと良い環境づくりをすることができる関係の素晴らしさを改めて感じました。

（2 年 5 組　上田　遥菜）

【現地研修②　プラスチック村】

2 日目の午後はプラスチック村を訪れました。プラスチック村に初めて入ったとき、臭いのきつさと地面が見えないほど転がるゴミや山積みにされたゴミに驚きました。ゴミの中には、ペットボトル、食べ物の袋、いろんな色や大きさのビニール袋など、たくさんのプラスチック関連ゴミがありました。近くを流れる川の水の色は濁りきり、汚染された油のようなものが一面をおおっていました。とても川とは言い難く、サラサラと流れるイメージの川の水が油のせいで流れが遅く感じるほどでした。日本でも川にゴミが浮いている光景は見たことがありますが、比にならないくらいのたくさんのゴミが捨てられていました。

このような過酷な環境の中で暮らしている方がたくさんいると思うと、今、自分が暮らしている状況とうはあまりにも違い、いかに自分が恵まれているかを目の当たりにしてとても心が痛くなりました。

この村で暮らしている方の主な仕事は、プラスチック村という名前の通りプラスチックに関連する仕事が多く、その分別やリサイクルを行っているということです。中には一日中外に座り小さくなったプラスチックの破片を再生しやすいように色分け作業を行っている人もいました。新たなプラスチックの元のようなものを作っているところは何軒もあり、そこでは日本の企業でも使われているような装置もいくつかありました。

ベトナムの町を歩き、道端のゴミ箱や持ってきたプラスチックを換金する小店を見ました。この村に集まってくるゴミは、分別されず何もかもがまとめて捨てられ、ゴミ箱は溢れかえっている状況でした。

プラスチック村を実際に訪れ、特に分別の大切さを実感しました。日本では分別することを当たり前として私たちも行っています。ベトナムでは分別に対する呼びかけが、まだ人々の生活に浸透していないと感じました。自分が今捨てようとしているゴミを正しい処理の仕方で正しい場所に捨てるだけで、何人もの人の労力が少しだけでも省けます。それをたくさんの人が行うことによってもっとリサイクルしやすくなると思いました。自分たちが暮らす環境とはかけ離れた場所を実際に見てみることによって、資料だけではわからないゴミ問題の深刻さを体感することができました。

（2 年 3 組　湯川　可蓮）

【現地研修③　ベトナム AEON の取組】

5 日目はベトナムの AEON に行きました。日本にある AEON とお店の並び方や造りはとても似ていて、久しぶりに日本を味わった気がしました。ベトナムの AEON では、各階の所々に約 8～9 個ずつゴミ箱が設置されていました。日本に比べてゴミの捨てられている量は少なかったです。

この日のためにわざわざ日高町から荊木さんが来てくださいました。荊木さん、ベトナムのイオンモールの従業員さん、通訳のビーちゃんとたくさんの方々に協力していただき、ベトナムの AEON でのごみ問題に関しての取組を聞かせていただきました。ベトナムの AEON ではゴミ箱は家庭ゴミ、リサイクルゴミ、有害なゴミの 3 つに分けているそうです。去年から家庭ごみはペットボトルと食べ物の廃棄からなる生ゴミの 2 つに分けるようにしたそうです。日本にいると分別して捨てるという行動は当たり前ですが、ベトナムで分別して捨てられているのは約 2 割ほどだそうです。そのため、ゴミ箱のゴミを撤去した後、清掃員の方が最終分別をし直すそうです。二度手間になる前にゴミを捨てる人たちの意識を改善して、分別を進めていくべきだと考えました。

一方で、AEON ではエコバッグの使用を奨励したり、毎月 5 日・20 日にはイオンメンバーのお客様に米粉でできたリサイクルストローを配ったりするなど、プラスチックゴミ削減に向けた取組も進めているそうです。

（2 年 3 組　中山　莉沙）

研修を通して、ベトナム人と日本人ではそもそもゴミに対する考え方が違うのではないかと思いました。ベトナムではゴミを捨てたい時にゴミ箱が見当たらなかったら、自分で持っておくことはせずにポイ捨てをする人が多いようです。ベトナムの町で見かけた、道に山積みのゴミは日本では見たことがないため、信じられない話でした。それを知った時、私は両国のゴミに対する価値観、町をきれいにしようという価値観がそもそも異なっているのではないかと気づきました。

ベトナムでも分別してリサイクルしようという取組はあります。それを皆が実行するようになるためには、JICA で学んだように「教育」が大切だと思いました。まず、ゴミをゴミ箱に捨てるようにする取組が必要だと思います。自分たちが計画している、ポップなどを付けて呼びかけることは、ベトナムでも取り入れてもらいやすいよい方法なのではないかと思いました。

（2 年 3 組　武内　優希）

【現地研修④　ベトナムの高校にて】

私は、11 月 4 日から 11 月 8 日までの 5 日間ベトナム研修に参加しました。そのうち 1 日は現地の高校、チャンフー高校を訪れました。両国のゴミ問題について話し合い、世界の環境問題への理解を深め、解決策や自分たちにできることは何かを追求しました。私たちは、大洋化学で学んだことや日高高校生を対象に行ったアンケートなど事前学習の成果から分かった日本の課題やプラスチックゴミ問題、これらを解決するために自分たちが行っていることなどについてプレゼンテーションをしました。内容はとても良かったと思います。誰でもできるプレゼンではなく自分たちだからこそ伝えられることをたくさん詰め込みました。ただ、私が思ったのは発表技術です。まず発表練習を一度もしていない状態で本番を迎えたので英語の発音が分からなかったり、作ったパワーポイントが全部入っていなかったりなどのミスが起こりました。これは詰めの甘い部分だったと後悔しています。また、声の大きさ、抑揚、アイコンタクトなど相手を引き付けるような技術もまだまだチャンフー高校の生徒よりも足りなかったように思います。面白い内容をより興味をもって聞いてもらうにはこれらの技術は不可欠です。チャンフー高校の生徒の発表は私のとてもいい目標になりました。

チャンフー高校の子たちはとても気さくでした。初対面の時からスキンケアの話を振られたときは驚きました。しかしそういう美容に関する話題は、やっぱりどこの国の女の子でも一緒なのだと思いました。また、私たちよりもはるかに英語力が高いと感じました。ベトナムの教育水準が高いというのはあまり聞いたことはないですが、英語の教育は確実に日本より高いと思います。ベトナムに限らず、私が今まで行ったすべての国で日本人の英語力の乏しさが感じられました。これから、もっとグローバル化が進む中で日本人がより活躍するためにはこれが大きな課題となるでしょう。もっと私たちが英語を身近に感じ、体験することによって英語力は格段に上がります。そのためにも海外研修に参加することでこういう高校訪問などの現地の人たちとコミュニケーションをとる機会が得られます。また、そこで出会った人たちと何かしら連絡手段を持つとまたいつかどこかで会える機会があるかもしれません。世界中に友達が増えることはとても素敵なことだと思います。今回も交流を通してたくさん友達を作ることができました。世界を超えたこの友情もいつまでも大切にし続けたいです。

（2 年 6 組　源地　菜月）

【現地研修⑤　総括と私たちの今後の課題】

SGH ベトナム研修で、私たちは世界のプラスチック問題、ベトナムのゴミ問題の現状などを中心に多くのことを学びました。この学びは、和田さんをはじめ大洋化学の松山さんや日高町の荊木さん、ベトナム AEON モール従業員の方々といった多くの方の支援と協力のおかげで得られたものでした。ベトナムのゴミ処理の様子やリサイクル事業を中心とするプラスチック村の訪問では、インターネットで調べるだけでは決してわからないゴミ集積場の「におい」やゴミが埋め立てられている丘の「景色」を五感で感じることができました。帰国後はポップ作製や広報活動によって、学んだ成果をより多くの人々に伝えていきたいです。

現地の高校生とは、自国のプラスチック問題に関するプレゼンテーションをお互いに発表しあい、3R の重要性を一緒に確認しました。また、テーマへの協働学習以外のところでは、ベトナムの高校生の英語能力や伝達力、それらを総合したプレゼンテーション能力にとても驚き、多くのことを学ぶことができました。

2 月には、東京で開催される全国海洋教育サミットでポスターセッションを行うことになっています。まずはそれに向けて自分たちの活動を整理し、まとめていきたいです。

（2 年 3 組　岡本　祐希奈）

姉妹校交流

中国　西安中学校訪問

1. 目的

国際理解教育の推進のため、人権教育を基本とし、異文化に関する知識を得たり、体験したりすることを通して、豊かな国際感覚と平和を希求する精神を備えた人材の育成を目指している。その取り組みの一つとして、中国陝西省西安中学と姉妹校の絆を結び、交流を深める。

2. 日時

2019 年（令和元年）　9 月 9 日（月）―　9 月 13 日（金）　（現地 4 泊）

3. 研修先

中国・陝西省西安

4. 事前・事後研修

(1) 事前研修①中国語研修：夏季休暇中

(2) 事前研修②プレゼン準備：8 月－9 月

(3) 事後研修　研修総括、プレゼン準備、報告書作成：9 月―1 月

5. 研修団

参加生徒：中学 3 年生 3 名、高校 2 年生 7 名　計 10 名

引率教員：2 名

6. 主な訪問先

(1) 陝西省歴史博物館　Shaanxi History Museum

(2) 兵馬俑　Mausoleum of the First Qin Emperor

7. 研修日程

日次	月日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	内容(宿泊地)
1	9月9日(月)	関西空港集合 関西空港発	12:30 14:00	3U8802	

		西安空港着 西安中学着	17:15 19:00	専用車	ホストファミリーと合流 （西安泊）
2	9月10日 (火)	西安中学集合	08:00 08:15 09:00 12:30 14:30 16:00 18:00	徒歩	歓迎セレモニー 校内資料散策 生徒交流 授業参加 課外活動見学 ホスト生徒と帰宅 （西安泊）
3	9月11日 (水)	西安中学発 歴史博物館着 兵馬俑着 西安中学着	08:30 09:00 13:30 17:00	徒歩 専用車	陝西省歴史博物館参観 兵馬俑参観 ホスト生徒と帰宅 （西安泊）
4	9月12日 (木)	西安中学集合	07:30 12:30 14:30 16:30 18:00	徒歩	授業参加 生徒交流 授業参加 環境保護に関するゴミ分別の発表 ホスト生徒と帰宅 （西安泊）
5	9月13日 (金)	西安中学発 西安空港発 関西空港着	06:00 08:40 13:00	専用車 3U8801	着後解散

【2 日目】

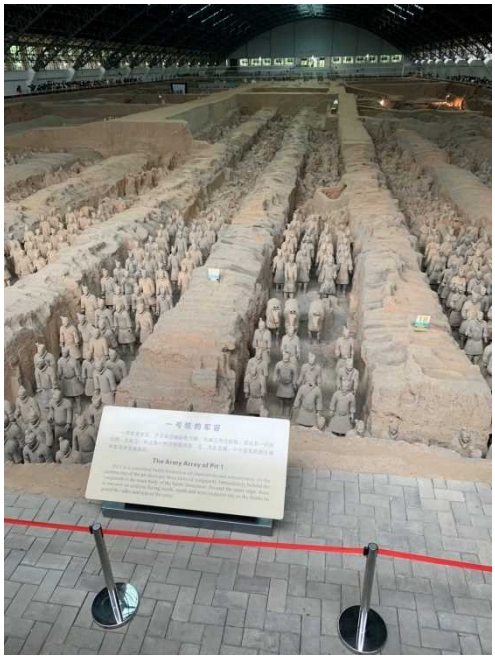
朝は 6 時半過ぎに家を出て、7 時半から授業でした。ちなみに日本との時差は－1 時間なのでいつもとそれほど変わりませんでした。2 コマ授業を受けた後、学校を案内してもらいました。学校は、大学のように広く、食堂や講堂、体育館、音楽や芸術の授業を行う特別教室などを見て回りました。驚いたことに、図書館棟の 1 番上には博物館があり、様々な生物の剥製や標本が飾られていました。それらは全て館長が収集し、剥製や標本に加工したと聞きました。パンダに始まり、虎、牛、鳥、虫など様々な剥製や標本を紹介してくれました。昼食は学生食堂の上の広い部屋で、西安の生徒たちと食事をとりました。バイキング形式で大きなプレートにそれぞれ好きなものをとり、みんなで丸い中華机を囲んで食べました。日本ではしょっぱい部類に入る卵スープが甘くて、あまり私の口に合いませんでした。学校が終わってから、自分たちは地下鉄に乗って大きなショッピングモールに行きました。西安はかなり大きな町で、基本的に大きな駅のそばにはショッピングモールがあり、自分たちは滞在した 3 日間、お土産やほしいものを買うためにいくつかのショッピングモールに連れて行ってもらいました。中国にもしゃぶしゃぶがありました。日本とは少し違ったけれどとても美味しかったです。日本ではめったに食べない肉の部位も出てきて、恐る恐る食べました。ショッピングモール内にはタピオカや服屋、アクセサリーショップなどが沢山あり地下を含めて 10 階以上あり、どのショッピングモールもとても大きかったです。日本とは違った中国に触れて驚きの初日でした。

（2 年 1 組　森口　叶南子　　2 年 3 組　鳴川　奈那）

【３日目】

3 日目は陝西省歴史博物館と兵馬俑に行きました。

私たちが訪れた博物館は中国陝西省にある歴史博物館で、展示品の質や量とともに中国国内有数の所蔵を誇っています。秦始皇帝陵・唐代の帝王陵にまつわるお墓からの出土品や、前漢に始まる本格的な生活用品の陶器、唐代伝来の壁画の人物像・楽器・瑠璃・ガラス製品などの宮廷用品に、シルクロードで交易していた際の交易品が数多く展示されていて見ることができます。入口を入ったところすぐに唐時代の巨大な石獅子のレプリカがあり、博物館内はいくつかのブースに分かれています。スクリーンを使った簡単なアニメーションや建物の模型などの様々な展示物を見ると同時に陝西古代文明を学ぶことができます。また、兵馬俑も置かれています。馬や体制の違う兵士の像などを身近に見ることができるため、兵馬俑の迫力を感じることができました。私たちが行ったときには国宝展として「ラクダに乗った胡人人形」が展示されていました。長旅に疲れながらも歩き続けるラクダと、そのうえで居眠りする外国人があらわされています。唐の時代に土でつくられたものだそうですが、土器のようではなく大理石のように真っ白で綺麗なものでした。



その次に兵馬俑を訪れました。兵馬俑は古代中国で死者を埋葬する際にともに埋葬された俑のうち、兵士や馬をかたどったもので、さらに秦始皇帝陵兵馬俑坑から出土されたものをいいます。古代では死んだ皇帝、高官を埋葬するときに、一緒に陶製の人物「俑」などを埋めることで、死後の世界でもその人に仕えることができると考えられていました。始皇帝陵兵馬俑坑では今までに約 8,000 体もの俑が確認されています。しかも兵の顔に同じものはなく、昔はそれぞれの兵に顔料で色がつけられていたことも分かっています。現在も発掘・研究が続いていて、兵馬俑に行った際には実際に発掘している様子を見ることができます。たくさんの兵馬俑が並んでいるところや、展示されている兵馬俑は大きく、その迫力に圧倒されました。

（2 年 3 組　更井　李穂　　2 年 4 組　扇田　悠汰）

【4 日目】

4 日目は中国で過ごす最後の日でした。午前中は西安の生徒達とラストの授業を受けました。西安の生徒たちはとても勉強熱心で授業中も積極的に発言している子がほとんどでした。国語の授業では聞いているうちに読み方が分かってきたりして楽しかったです。授業の後は食堂で昼食をとりました。私はこの日はビャンビャン麺を食べました。バイキング形式だったので好きなものが食べられるようになっていました。午後からは西安の生徒達と最後の交流をしました。こんな時でも勉強をしている子がいてすごいなと思いました。交流の後はプラスチックゴミについてのプレゼンを行いました。私たちの発表が終わったら大きな拍手をくれました。日本の良いと思った点は真似して西安の生徒達から街を綺麗にしていってくれたらうれしいなと思いました。最後の夜はホストの生徒達が夜ご飯に誘ってくれたので、一緒に食べに行きました。夜市やショッピングモールを回ってくれました。西安の生徒たちの支払いは全て電子マネーでした。地下鉄に乗るのも電子マネーでこういったところは日本よりも進んでいるなと感じることができました。電車に乗る前に手荷物検査をするといった安全対策がされていて、これなら電車内での事件は防げるなと思いました。でも手荷物検査を通るのに時間がかかるので、急いでいるときは困るなと思いました。とても楽しく充実した日を送ることができました。

（2 年 3 組　中山　莉沙　　2 年 3 組　湯川　可蓮）

【感想①】

今回の西安研修は、海外研修に初めて参加した私にとって、“何事にも挑戦することの大切さやそれによって得るものの重大さ”を今までのどんな活動よりも感じることができました。そんな研修の中でも“多くの人々との交流”から私はたくさんのことを学びました。西安中学校の生徒の皆さんはとてもフレンドリーで、休み時間になるといつも話しかけてくれました。また、ホストファミリーもとてもやさしくて、そんな人々と関わりながら過ごす日々は有意義で充実したものとなりました。また、生徒の皆さんと交流する中で少しずつ距離が縮まっていくのを感じ、改めて人と関わり交流することの大切さを感じました。今現

在、日本は他国との様々な問題を抱えています。私は今回の研修から人々との交流と、その交流から関係を深め合い、相手のことを知る素晴らしさを学びました。だからこそ交流をより増やすことによって他国との問題は解消されていくのではないかと考えました。まずは今回の私たちのように海外研修に行き相手の文化などについて知る。このような交流を積み重ねていくことで、国同士の関係をより良くすることに繋がるはずです。そのための第一歩を踏み出す勇気を持つことの大切さを、私は多くの人に知ってもらいたいです。だからこそ、これからの多くのイベントや行事で今回の研修で学んだことを活かし、自分でも「成長したな」と感じられるようになりたいです。

(3 年 A 組　上田　愛莉)

【感想②】

今回西安中学校を訪問し、西安を観光する中で感じたことが多くあり、それらはどれも日本では経験できないものばかりで、訪問に参加したからこその貴重な体験でした。例えば外国の地での英語や日本と全く違う習慣や文化など、同じアジア系で隣の国なのに日本と全然違って慣れないことばかりでしたが、それが逆に私にとって貴重なものとなりました。

色々な経験をした中でもやはり一番大きかったのはホームステイです。家族なしでの外泊は初めてなのに異国の地で初めて会った人と 5 日間生活するということに「きちんと会話できるかな、もし何かあったときどうしよう」という不安が結構ありました。これらの不安で参加しようか迷いましたが、今思えば参加して良かったととても感じることができます。なぜなら、ホームステイは普通に外国に行ってホテルに泊まるよりもその国の文化や習慣を体でしっかり体験することができる上に、家庭料理も経験することができるなど、ホームステイだからこそ体験できるもの知れるものがたくさんあるからです。また、心配していた英語は意外と簡単な単語だけで話すので十分通じましたし、分からない時は近い単語を並べたり、ジェスチャーで表現したりするだけでも相手に伝わったので、そんなに心配しなくても良かったなと思いました。でも、人見知りの性格が出てしまい、あまり家族と会話できずに終わってしまったのでもっといろんなことを聞いたりして他愛のない話をしたら良かったなと後悔しています。ホストファミリーは親も英語を話せていて、日本の普通の学生以上に話せるのではないかと感じるほどでした。日本では多分ほとんどの人がそんなに英語を話せないので、もっと日本人は英語を話せるようにならないといけないなと思いました。それはこれからの世界のグローバル化にも必要ことなので、英語を身につけておいて損することはないと思います。

今回の西安訪問でたくさんのことを学ぶことができ、これからの私に役立つものもあると思います。これで得たものをしっかり頭に入れ、色々な場面で活用できればいいなと思います。

(3 年 B 組　楠　晴華)

【感想③】

私は中国に対してのイメージがテレビなどを見ていてあまりよくありませんでした。けれども、実際に行くと自分が知っている感じとは違い、中国に対してのイメージが変わりました。そして私はこの研修に参加するまでとても不安でしたが、今回の研修に参加して本当に良かったと感じました。今回の研修に参加して感じたことが２つあります。

1 つ目は、言語が違っても思いは届くということです。ホストマザーはとても親切で、英語を話すことはできませんが何とかコミュニケーションを取ろうと工夫してくださいました。お母さんと一緒に買い物にも行き、言葉が通じなくても楽しむことができました。そして、ホームステイ先の子は男の子で少し不安でした。けれども出会った時から荷物を持ってくれたり、積極的に話してくれたりととても優しくしてくれ、不安はすぐになくなりました。日本でもこんな人が多くいたらいいのになと少し思いました。お互いの学校について、日本と中国についてなど色々と話し、コミュニケーションを取ることができました。そして、ホストファミリーはとても優しくしてくれて、お土産もたくさんくれて、色々なことを体験させてもらいました。校内の説明も学生の皆さんがしてくれ、伝わらないこともありましたが、たくさんコミュニケーションを取ることができました。

2 つ目は、西安中学校の生徒の皆さんは興味を持ってくれていることを感じました。初めて授業に参加した日には教室に入ると、「こんにちは」と明るく迎えてくれたので、とても嬉しかったです。日本語をうまく話せる人や必死に日本語で話しかけてくれる人もいました。ホストブラザーの子も日本のことについてたくさんの質問をしてくれました。特に興味を持ってくれていると感じた瞬間は、ごみの分別についての発表の後の質疑応答です。質問が途切れることなく時間いっぱい質問がありました。そのことから興味を持ってくれているのだと感じられました。そして、そのような光景を日本ではほとんど見たことがなかったのですごいなと思い、私たちも見習うべきだと思いました。私はプレゼントとして折り紙を折って渡すととても喜んでくれたので、とても嬉しかったです。中国に行って日本と違う点が多く驚くことも多くあったけれど、とても良い経験になりました。日本で英語の勉強をするとどうしても日本語を使ってしまいますが、外国に行くと絶対に英語を使わないと伝わらないので、英語を学ぶには良い環境だと思いました。今回は 4 泊 5 日と短いあいだだったので、もう一度中国に行きホストファミリーと会い、文化など色々なことをもっと学びたいなと思いました。そして、お世話になったホストファミリー、西安中学校の学生の皆さんに感謝の気持ちを忘れず、今回学んだことをこれからに活かしていきたいです。今回の体験はとても良い思い出になりました。

(3 年 A 組　竹中　雪乃)

デンマーク　フレデリクスハウン高校訪問団来校

1. 交流の経緯

・2010 年 11 月　日高高校から初めての訪問団を派遣。

・2011 年　フレデリクスハウン高校からの訪問団を受け入れ、その節に姉妹校提携。

その後、お互いが隔年に訪問団を派遣しながら友好関係を継続し、今年は 5 回目の受入。

2. 交流日程

2019 年 10 月 15 日（火）―20 日（月）6 日間

3. 日程概要

日次	月日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	内容(宿泊地)
1	10 月 15 日(火)	関西空港着 日高高校着	8:45 11:00	KL867	昼食交流・歓迎 AS （ホームステイ）
2	10 月 16 日(水)	日高高校	午前 午後	バス	校内散策・授業参加 校外学習（道成寺散策） クラブ体験 （ホームステイ）
3	10 月 17 日(木)	日高高校	午前 午後		授業参加 協働学習「教育」 クラブ体験 （ホームステイ）
4	10 月 18 日(金)	日高高校	午前 午後		授業参加 協働学習「防災」 生徒交流会 （ホームステイ）
5	10 月 19 日(土)		終日		ホストファミリーと行動 （ホームステイ）
6	10 月 20 日(日)	日高高校	8:00	送迎バス	集合・記念撮影 ホテル着後、お別れ

4. 訪問団、ホストファミリー構成

(1) 訪問団　生徒 8 名、引率 2 名　計 10 名

(2) ホストファミリー　1 年 2 名、2 年 2 名、3 年 4 名　計 8 名（うち前回訪問生徒 5 名）

【ホームステイを受け入れて】

私は今回のホームステイの受け入れに緊張していました。何故なら、私は英語が得意でなく、ホームステイを受け入れた経験もなかったからです。でも、私自身は国際交流に興味があり、他国の文化を学ぶために1年生、2年生で海外研修へ行きました。2年生のときに行ったのがデンマークです。そこで、初めてのホームステイを経験しました。

帰国後、今回来るのは私がお世話になった生徒たちだと聞いたとき、「私もホームステイを受け入れたい」とすぐに家族に相談しました。家族は不安がっていたけれど許してくれました。

私のところにはサラという女の子が来ました。サラは明るくて話しやすく、面白い子でした。そして今まであった不安は楽しみへと変わりました。また私は英語をすらすらと、まではいきませんが、心配ないくらいに話すことができるようになりました。英語が話せない私の家族とも明るく接してくれて、とても良い子だと思いました。夜は、私とサラは同じ部屋で寝ることにしていたので、その分コミュニケーションもとれました。日本とデンマークでは学校の文化で異なる点があり、ボーイフレンドやお化粧、将来の話で盛り上がりました。

さらに、放課後にはみんなでボーリングをしたり、ガストで夕飯を食べたりしました。そして、サラには浴衣に挑戦してもらいました。季節外れでしたが喜んでもらえました。

休日は朝からイオンモールへ出かけました。ゲームセンターに行ってプリクラをとったのが1番の思い出です。サラに欲しいものを尋ねたら、着物や浴衣を着るときにつける「髪飾り」を探していました。浴衣を気に入ってくれたのがとてもうれしかったです。

今年は日程の中に休日を設けてくれたので、短い時間の中でたくさんのことを経験してもらえたと思います。来年、ホームステイを少しでも受け入れようと思う人は、どんどん受け入れてみてください。

（3年3組　辻道　萌）

【ホームステイを受け入れて】

私は、10 月 15 日から 20 日までの 5 日間、日高高校の姉妹校であるデンマークのフレデリクスハウン高校からの留学生のホームステイを受け入れました。彼女の名前はシレといいます。聞きなれない名前なので最初はなかなか聞き取ることができませんでした。受け入れ前、シレの簡単な自己紹介シートのようなものをもらって軽く目を通すと、趣味は読書、興味のあるものはまさかの文房具。正直、仲良くなれるかとても心配になりました。これまでにも私の家はデンマーク人 2 人と中国人 2 人を受けいれたことがありましたが、ここまで自己紹介がザ・文学少女という感じの子は初めてだったからです。私とは正反対のシレを受け入れるにあたって、全世界で人気で有名な本をたくさん調べました。

そしてついにホームステイ一日目、初対面の日になりました。これまでのホームステイは夜中に到着することが多く、一日目は長旅で疲れているせいか晩御飯を食べないことがほとんどでしたが、今回は昼に到着したので晩御飯を一緒に食べることができてよかったです。シレにとって初めての日本食にはラーメンを選びました。理由は、ただただ私が極度のラーメン好きで、ぜひ食べてもらいたかったからです。しかし、残念なことにラーメンも一緒に頼んだ餃子も口に合わなかったようでした。ホームステイ中、他にも手巻き寿司やお好み焼きなどの日本食を試しましたがどれもあまり食べてくれませんでした。一番良かったのはガストで食べたステーキだったように思います。1 日目の終わりにはデンマークのお土産をもらいました。たくさんのお菓子とクリスマスの飾り、デンマーク語で書かれた本をもらいました。お互いについての話もしました。読書が好きだというのは、難しい小説などのことだと思っていたのですが、私の部屋にある日本の漫画を見てとても喜んでくれたので共有できる話があってうれしかったです。2 日目の放課後、今回来たデンマーク人とホストスチューデント全員でボーリングに行き、その後オークワ内を散策した時は、ダイソーを一番楽しんでいました。3 日目の放課後の時間は TSUTAYA で過ごしました。読書と文房具が好きだと言うだけあって、とても真剣に買うものを選んでいました。日本らしいことを体験してほしいという父の提案もあって、4 日目は、しの友で着物体験をしました。着付けの時はとても緊張した様子でしたが、着付けが終わるとすごく嬉しそうに鏡を見ていて、私も嬉しかったです。最後の休日は、同じく今回受け入れをした中さんと、中さんの家にホームステイしているマグナスも一緒に、昼間和歌山県が誇る動物園、アドベンチャーワールドに行きました。雨で全部回りきれなかったのがとても残念でした。夜は伝統衣装のやっこや足袋を履いて中さんの地元の祭りを見に行きました。日本の文化としてよく知られているものだけでなく、こういう地方の伝統文化も体験して知ってもらうことができてよかったです。

（2 年 6 組　源地　菜月）

【ホームステイを受け入れて】

ホームステイを受け入れて本当によかったと思いました。去年、中国の子のホームステイを受け入れ、また今回家に来るデンマークの生徒は去年デンマークを訪問した際の自分のホストファミリーということもあり、あまり緊張はしていませんでした。しかし、生活の仕方や食文化が全く異なると思うので、その面での不安は少しありました。

しかし、来てくれた子は何でも「おいしい」と食べてくれて私も家族も安心しました。中でも1番美味しかった料理は、お好み焼きだそうです。他のデンマークの子に聞いても、小麦粉だからなのか、お好み焼きやたこ焼きが美味しかったと言っていました。

また、日本文化を積極的に体験しようとする姿勢が見られ、うれしかったです。ご飯を食べる時も、食べにくそうにしていたので、「フォークやナイフを使っていいよ」といっても、「せっかくきたから」といって、必死にお箸をつかって食べていました。

お風呂は最初シャワーだけだったのですが、宝の湯に行って湯船を気に入ったらしく、家でも湯船につかるようになり、「デンマークに帰っても湯船につかりたいのに、家にバスタブがない！」と言っていました。

デンマークには食後も長い時間家族と会話を楽しむ文化があることもあり、夕食後には私の家族と一緒にたくさんお話をしました。お互いの国の学校生活や福祉や政治、今の流行りや、ホームステイに来た子が今までに訪れたことのある国のことなど、様々なことを話しました。新しい知識を得ることもでき、デンマークの子は英語がネイティブなみに流暢なため、自分も懸命に英語を聞いて、家族が言ったこと、自分が言いたいことを英語で伝えようと必死になることが出来たので、とても良い英語の勉強になりました。

自転車で登下校したのですが、その時も「あの建物は何？」など色々質問してくれたので、自分も、地元や日本のことを改めて学ぶことができました。

ホームステイの受け入れは、自分も家族も身近に異文化と触れ合い、地元のことを再発見することが出来るきっかけになると思うので、ぜひ受け入れてみてください。

（3年5組　中村　玲那）

【ホームステイを受け入れて】

ホストファミリーになって学んだことは、コミュニケーションの大切さと、国が違ったとしても素敵な絆が生まれることです。たった 5 日間だけでホストシスターとあんなに仲良くなれると思っていなかったし、5日間がすごく短く感じました。

英語もまともに話せなかったけど、自分なりに一生懸命話して相手伝わった嬉しさはずっと忘れません。学校では、授業交流で体育と英語表現を体験して、楽しそうにしてくれて

よかったです。昼食は、デンマークでは昼ご飯は教室でしか食べないので、ホールで食べるのが初めてだったらしく喜んでくれました。

教育についてのプレゼンを英語で発表する時はみんなでグループになってたくさん討論でき、すごく緊張したけれどとてもいい経験になりました。

家では、お互いの国や学校、家族などいろんな話をして、たくさん質問をしました。ホストシスターと話していた中で、自分が日本のことについて勉強不足だなと感じることがたくさんありました。だから、いろんなことに興味を持って勉強をしていきたいと思いました。

一日一緒に行動する日は、那智の滝と熊野大社とわたらせ温泉に行きました。那智の滝は、ホストシスターが行きたいと言っていて、雨だったけど喜んでくれて本当によかったなと思いました。

最終日の朝、お別れするのはすごく悲しいし寂しかったけど、いい思い出と経験がたくさんできたので心残りはないです。未熟で何も知らない私を支えてくれた家族、先生、先輩たち、本当にありがとうございました。

（1 年 5 組　樫木　彩）

【ホームステイを受け入れて】

僕がホームステイを受け入れた理由は、2 年前に姉がデンマーク生徒を受け入れていて、そのとき僕も楽しかったので今回僕も受け入れてみようかなと思ったからです。今思えばたくさんの楽しい思い出が蘇ってきます。

我が家に来てくれた生徒は Alberte です。初日、彼女と交流会で初めて会った時僕は緊張していたので、英語でうまく話が出来ませんでした。それに外国の人と初めて会話をしたので、自分では出来ると思っていてもいざとなったら話せないなあと思いました。こうして約 1 週間の生活が始まりました。その中で一緒に色々な体験をしました。僕が印象に残っているのは、家族で食事を一緒に楽しんだこと、教室で一緒に勉強したことです。

シチュー、手巻き寿司、肉じゃが、みそ汁、お好み焼き、ラーメン、すき焼きなど色々出してみましたが、その中でもお好み焼きと手巻き寿司がとても気に入った様子で喜んで食べていました。彼女はデンマークに帰っても同じものを作りたいと言っていたので材料や作り方を教えました。食事中、母がフォークやナイフを用意していましたが彼女は「せっかく日本に来たから滞在中はお箸を使って食事をしたい」と言ってとても上手に使っていました。お箸を使って食事をし、「いただきます」や「ごちそうさまでした」という日本の言葉や文化を積極的に学んで使っていました。そこで母が「日本でしてみたいことはなんですか？」と尋ねると彼女は「着物を着たい」と言ったので、母の着物を着せてあげました。すると彼女はとても喜んでいて、写真をたくさん撮りました。

また教室で一緒に授業した事も特に印象に残りました。本校の生徒とデンマークの生徒で自然災害や防災について話し合いました。例えば日高高校では 1 年にいくつかの避難訓練を行っており、防災についての授業もある事を伝えたら、デンマーク生徒は日本での防災意識が高いことに感心していました。でも防災や自然災害についての問題が出たとき、デンマークの生徒と協力して問題を解いていると、彼らもたくさんの意見を出してくれたので彼らも防災や自然災害についての意識が高いことに気がつきました。僕も意見を出しましたが彼らは自分の考えを持っていて、思ったことをすぐに発表できるので僕もそのような意識を見習ってこれからに生かそうと思いました。

僕はホームステイを受け入れて、外国人と話す楽しさや大切さをより感じられました。初日は話す事に緊張やためらいがありました。でも話していくうちに緊張やためらいが無くなっていき、気が付くとまるで家族のように接していました。僕はホームステイを受け入れたことで、何事にも積極的に行動していこうと思いました。僕はいつも行動に移す前に不安やためらいなどマイナスの感情が心の隅にあって、実際に行動に移さないことがありました。しかし今回のホームステイの受け入れは、家族にとっても僕にとっても貴重な体験や経験ができると思い、一歩を踏み出して決断しました。その結果、僕はかけがえのない大切な思い出を作ることが出来ました。

Alberte が 1 週間滞在してくれただけでも、新たな気づきや学びを得られる体験になりました。今回頂いた機会を通して得た学びを、今後の生活に生かしていきたいと思います。今回はホームステイを受け入れた側なので、来年のデンマーク研修に参加する機会があれば、デンマークの国についてきちんと事前学習をして研修に臨みたいと思います。

（1 年 4 組　栗林　慶）

【ホームステイを受け入れて】

英語が流暢ではない私にとって、ホームステイを受け入れることは不安ばかりでした。しかし、去年デンマークに行った時ホームステイで受け入れてくれた皆さんが優しくしてくださったことを思い出し、受け入れることを決心しました。デンマークは北欧なので、食事・生活習慣・文化など異なる点がたくさんあるはずです。日本に合わせるのはつらくないかと悩むこともありましたが、日本を目いっぱい知ってもらうことにしました。

来てくれてからの一週間はあっという間で、とても濃い日々でした。日本食はあまり好んでくれないかと思っていましたが、意外と何でも食べてくれました。特に喜んでくれたのは肉じゃがやすき焼きの様な甘辛い味付けのものでした。積極的に食べてくれ、日本人としても嬉しかったです。デンマークにもお寿司があり、とても人気です。しかし、値段はとても高く、家族で行くと数万円もするそうです。だから家で手巻きずしをした時もとても喜んでくれました。

休みの日には、秋祭りを見に行きました。地元の祭りがあったので祭りの恰好をして行くことにしました。背中に書いている天狗の絵や足袋を特に気に入ってくれました。今の時代の日本でも、こんな格好をすることがあるのかと感動していました。四つ太鼓や獅子舞も新鮮で面白いとずっと動画を撮っていました。三日目の放課後に、日本をもっと知ってもらうために銭湯にも行きました。デンマークでは浴槽に入らないどころか、シャワーも毎日しないということでした。慣れないお風呂にのぼせてしまい、長い時間は入ることができないと思っていました。しかし、銭湯をとても気に入ってくれ、デンマークにもあればいいのにと言っていました。日本に来てもその日までは毎日シャワーを浴びなかったのですが、お湯をためてほしいと毎日お風呂に入るようになりました。日本の文化が認められたようで、とても嬉しかったです。また、テレビゲームをしたり、弟の大好きなこまのおもちゃで遊んだりしました。弟は小学6年生で、まだ英語もあまり知りません。だから少しの間馴染むことができずにいました。しかしゲームを通して少しずつ話せるようになり、それから毎日仲良く二人肩を並べて、ゲームをするようになりました。弟はゲームで使われているような簡単な単語ですが、英語を使って会話できるようになっていました。この姿を見ていて、机に座って勉強することももちろん大切ですが、経験がどれほど人を成長させてくれるかがわかりました。

ホームステイの受け入れをして、英語で伝えたいことが全く伝えられず初めは申し訳ないと思ってばかりでした。しかし、少しずつですが言いたいことは何となくわかるようになり、いろんな話題の会話ができました。また、日本のいいところを知ってもらうため、事前に改めて日本についてたくさん調べたり考えたりしました。そのことを話し、デンマークとの違いを知って、日本の良いところを改めて実感することもできました。この体験は私にとって、また家族にとっても貴重で宝物のような思い出となりました。

（2年6組　中　ひより）

【ホームステイを受け入れて】

今回デンマークの生徒のホームステイを受け入れたことで、受け入れる前と後では英語に対する認識の仕方と、日本の文化への考え方が大きく変わりました。

今回デンマークのホームステイを受け入れるにいたった経緯は、自分が去年のデンマーク研修に参加したときのホストファミリーの温かい歓迎で、日本とは大きく異なった文化について楽しく学ぶことができたので、デンマークの生徒にも同じように楽しく日本の文化を知ってもらいたかったからでした。

ホームステイ中は日本を代表するような食べ物や遊び、イベントに触れてもらいましたが、その中でもお好み焼きがとても好評で、地域のお祭りもすごく気に入っていたのが意外でした。お好み焼きはソースがおいしかったらしく、お祭りはデンマークにはないので

新鮮で楽しかったようでした。基本的にすべてが違う日本とデンマークで、デンマークの生徒にとっては生活の全てが初めて経験することだったと思います。

そんな中で私は改めて日本の文化について考えさせられましたし、日本の良さを再確認できました。特にそれを感じたのが食事でした。日本は宗教的にもかなり自由だし、島国ということで日本食という唯一無二の食の形を作ってきているにも関わらず、世界中の食も日本風にアレンジしていて取り入れているということは忘れられがちなことですが、これほどまでにバラエティーに富んだ食の形を持っているのはたぶん日本だけです。実際デンマークの生徒には食事で合わないものもあったようでしたが、様々な種類に驚いていました。世界に誇れるくらい日本は食において優れているのだなと良さを再確認しました。

しかし、ホームステイ期間はたったの 1 週間弱でしたがその中でも言いたいことがうまく伝わらないことがあり、英語圏の国との差を感じました。英語が話せなくても何とかなるということをよく聞きますが、今回のホームステイ受け入れのように自分が主体的に話さなくてはいけない場面では、英語のスピーキング能力とヒアリング能力は大きな役割を持つと感じました。確かにジェスチャーや雰囲気で伝えられることもあります。ですが、日常生活をジェスチャーだけで過ごすことはできないものです。そしてスピーキング能力を上げるにはとにかく自分で言葉を発することが重要だと思います。このホームステイを受け入れたのは一週間弱でしたが、受け入れ前と比べるとかなり喋れるようになったと感じました。少しの間だけ自分から英語を話していただけでこんなにも効果を感じられるのだから、是非多くの人に経験してほしいと思いました。

最後に、英語に限らず日本語以外の言語に触れることで、自分の見る世界観に影響を与えるということ、自分の知らないことを経験したり感じたりすると、新たな感覚を養えるとともに、今いる自分の場所や状況の再確認になり、大きな意味があると思いました。

（3 年 5 組　楠　裕貴）

【ホームステイを受け入れて】

私が今回受け入れたのは、昨年デンマークに行った際、ホームステイ先でお世話になった Thomas です。昨年、向こうに行ったとき、様々な発見がありました。その時間が楽しかったということもあり、次は私が日本の文化や日本人の価値観を伝えたいと思いました。今までホームステイを受け入れたこともなく、家族の不安も大きかったものの、後から話を聞くと、とても充実した貴重な体験だったと言っていました。英語の必要性を実感したと共に、伝えようとジェスチャーなどを使うことが、いかに重要なことか身をもって実感しました。

この一週間は学校で一緒に授業を受けたり、クラブ見学をしたりするのがほとんどでした。Thomas は運動が好きだったので、クラブ見学と言いながらも、実際に体験していまし

た。学校内で部活動をすると思っていなかったらしく、「どこか行くの？」と聞かれたので、「学校であるよ。」と伝えると、びっくりしていました。また普段私たちが受けている授業に参加してもらいました。協働学習もあり、ディスカッションをしたり、プレゼンテーションを行ったりと、アクティブな学びが多く、私自身も楽しめました。

夕食は、Thomas の好きなものはお寿司だと知っていたということもあり、日本の本当のお寿司を食べてもらいました。「日本で食べたいと思っていたからとてもうれしい」と喜んでくれていました。向こうのお寿司は火を通しているものが多いらしく、生ものに対する抵抗があるのかなとか考えました。たこ焼きやすき焼きなどが夕食の日もありました。たこ焼きの日は実際にたこ焼き器を使って焼くのを体験してもらいました。Thomas や家族と楽しく食事をしている際、ふと気が付いたことがありました。それは、日本人の料理は、みんなで作りながら囲んで食べる形のものが多いということです。日本人の「和・輪・環」を感じてもらえたのかなと思います。

最終日は一日フリーだったため、和歌山の名所に行こうと考えていました。Thomas ととても仲がいい子とその子を受け入れていたホストファミリーと一緒に和歌山城に行きました。その日の夜はちょうど祭りの時期だったため、見に行きました。四つ太鼓はあっても、乗り子がいるのは御坊周辺と四国地方のみだと聞いたことがあったので見てほしいと思い、近くで実際に見てもらいました。最初見た瞬間は、驚いていましたが、豊作のことや、神様のことを話すと納得してくれました。日本の祭りとは少し違うけれど、向こうにもそういう行事があると言っていました。

今回受け入れて、日本の文化のすばらしさや日本人魂みたいなものを感じてもらえていたら嬉しいです。　　（3 年 5 組　髙野　杏華）

アジア・オセアニア高校生フォーラム 2019

【アジア・オセアニア高校生フォーラムに参加して】

2019 年の夏、私は和歌山県で開かれたアジア・オセアニア高校生フォーラムに参加しました。フォーラムはアジア、オセアニアの二十カ国・地域から高校生が集まり、日本からも県外 5 校、県内 11 校の生徒が参加する大規模なものとなりました。食糧問題、観光・文化、教育、環境問題、防災の五つのカテゴリーに別れて分科会で議論を行い、最終日に自分達が考える解決法を全体会に発表しました。

私は観光・文化カテゴリーの分科会司会者としてこのフォーラムに参加しました。分科会司会者とは、フォーラム三日目に行われる分科会でカテゴリー内の司会を担当し、最終日に行われる全体会での発表を進行する役割です。カテゴリーをまとめる責任があるので、私はやりきれるのかとても不安でした。そこで私は、フォーラムの二週間前に届いたカテゴリー発表者のプレゼン内容が書かれた冊子を使って内容を理解し、あらかじめ聞いておきたいことを英語で書き出しました。そうしたことで、発表者同士の共通点や相違点、特徴などを捉えることが出来たと思います。

観光・文化カテゴリーでは、「持続可能な観光」という傾向が全体に見られました。持続可能とは良く聞く言葉ですが、実際行うのはとても大変です。そこで私はメンバーに「持続可能な観光について私達高校生が出来る事は何か」という議題で話を進めていくことを提案しました。メンバーも同じように感じていたようで、持続可能な観光という大きなテーマのもと、自分達が出来ることを話し合いました。それぞれの国で考えられているテーマのようで、案がたくさん出ました。例えば、ゴミの不法投棄問題が深刻な韓国では、環境に残りやすいプラスチックを減らし紙製品で代用しているという案が出ました。実際に彼の高校ではプラスチックゴミの削減にむけて紙製品を作るプロジェクトが行われているそうで、韓国の観光地を汚染から守ることに一役買っているそうです。また、カンボジアでは最も有名な観光地であるアンコール・ワットを綺麗に保つため、地域の人々が清掃活動をしているそうです。私は彼らの話を聴いていると、観光地ごとにそれぞれの解決法があることに気づきました。そこで、私達は観光地産業に貢献できることを発表することになりました。種類別に分けると、ＳＮＳ、フェアトレード、教育のための観光、ボランティアの四つがどこの国でも共通する方法なのでは、という結論にいたりました。

このフォーラムではたくさんのことを学べましたが、特に大きかったのは観光という地域特定の問題について、グローバルな視点から考えるという道筋を知れたことです。それは実際に他の国や地域のことを聞いて密に話し合わなければ叶わなかったことでした。異なる国や地域同士で互いの観光について話し合えたことは、今後私の活動にも活きてくると

思います。いまグローバル化は刻一刻と進んでおり、グローバルとローカルのつながりが求められています。私はローカルの中で今まで生きてきましたが、その中にもグローバル化の片鱗が見られます。このフォーラムで学んだことを活かし、今後はグローカルな活動に繋げていければと思います。

（2 年 6 組　小串　楓子）

【アジア・オセアニア高校生フォーラムに参加して】

私は 4 日間に渡るアジア・オセアニア高校生フォーラでの活動を通して、色んな人と話すための知識の重要さと、挑戦することの 2 つの意義を学びました。

まず、知識の重要さについてです。私は教育分野における分科会発表者としてこのフォーラムに参加し、同じく教育に高い興味関心を持つ他の高校生と各国の教育について議論をしました。その中で、議論で扱われる内容のレベルの高さに驚き、それをものともしない周りの知識に圧倒されました。だから周りに逐一質問しなければならず、十全に議論を楽しめなかったように思います。

よく言われるように、国際社会において人々と議論するときには、英語力の有無はもちろん、話す内容も評価されます。後者を高めるためには何よりも知識が必要だと感じました。だから私は今後、自分の興味ある分野だけではなく、他の分野の本も読むようにし、自身の幅を広げていかなければならないと、強く感じました。そして今後アジア・オセアニア高校生フォーラムのように様々な背景をもつ人たちとの議論を思いっきり楽しみたいと思います。

次に、挑戦することの 2 つの意義です。それは高い目標となり、実力を高める指針になることと、自身の成長を実感し自信を深められることです。まず私はこのフォーラムで発表するにあたり、様々なことを計画し、こなすことをやり遂げました。それは私の計画力だけでなく、レポートを書く力などを伸ばしたと感じています。私は高校 1 年生の夏から 1 年間、オランダへ留学しました。ですが今まで特にと言って成長した、と感じることはなく、留学した 1 年間は無駄だったのだろうかと、考えることがありました。ですがアジア・オセアニアフォーラムにおいて、ある女の子から “You are friendly.” と指摘されたことで、自身の弱点だと感じていたシャイな部分が変わったことを認識しました。

普段の生活において、私たちは日々成長しているのだ、とよく言われますが、その成長を実感することはなかなかありません。何か大きなことに挑戦することでそれがはっきりと分かるのです。それだけではなく、大きなことに挑戦することは自身の実力を高めることにも繋がります。だから私は、今後も定期的にこのようなことにチャレンジし、自身を高めるきっかけにしていこうと思います。

（3 年 5 組　薮本　佳奈）